

ヨーロッパ国境地域における歴史意識と博物館： アルザス・モーゼル記念館の事例

著者名(日)	西山 暁義
雑誌名	共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要
巻	20
ページ	83-121
発行年	2014-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00002972/



ヨーロッパ国境地域における歴史意識と博物館 —アルザス・モーゼル記念館の事例—¹⁾

西山暁義

はじめに

フランス東部、アルザス地方の中心都市ストラスブールから車で西に40分ほど向かうと、ヴォージュ山脈とブリュッシュ川が織りなす溪谷の中心地、シルメックに到着する。この人口2千人余りの小さな町の外れの山麓に、2005年6月18日、新たな歴史博物館が開館した。「アルザス・モーゼル記念館」がそれである。バラ色の砂岩からなる中世の古城が点在するヴォージュの山麓の中で、ガラスとコンクリートからなる、異彩を放ついかにも現代的な建築物のなかには、19世紀後半から20世紀前半にかけてアルザス・ロレーヌ地方²⁾とそこに住む人々が直面した「苦難」が展示されている。

1980年代以降、ヨーロッパでは20世紀史をテーマとする博物館が数多く建設されており、フランスでは1981～1994年の間だけ第二次世界大戦とレジスタンスをテーマとする博物館が150以上も創設されている³⁾。その結果、ドイツとフランスの対立をめぐる2つの世界大戦の博物館や展示は、フランスの歴史博物館全体において重要な位置を占めている⁴⁾。言い換えれば、この歴史博物館の増加が象徴する「記憶の氾濫」のなかで、二度にわたりドイツによって侵略されたという前世紀の歴史が、フランス人の歴史意識にとって不可欠の構成要素となっているのである。

もちろん、その目的は普仏戦争(1870～71年)や第一次世界大戦(1914～18年)後のように、ドイツに対する復讐や敵愾心を煽りつつ自国の正当性を主張するものではない。そもそも今日、曲がりなりにもヨーロッパ統合の中心的役割を果たす両国において、そのような攻撃的ナショナリズムの言説が影響力を持ちうる公共空間の存在する余地はない。しかしその一方で、ヨーロッパ統合が20世紀の歴史の見方をも統合したと考えるのは短絡的である。そのような試みとしばしば見なされるドイツ・フランス共通歴史教科書にしても、両国の歴史の見方に対する差異は完全に抹消されたわけではなく、むしろ「視点の交差」として活用されている場合も少なくない⁵⁾。また、2つの世界大戦についても、第一次世界大戦が大量の兵士の死をもたらした「無益な戦争」として語られるようになって一方、より多くの、とりわけ民間人の死者をもたらした第二次世界大戦は、あくまでも人種主義的ファシズム体制という「絶対悪」に対する民主主義の擁護の闘いであり、それこそが現在のヨーロッパ統合の土台となる価値観と見なされている。必然的に、とくに後者についてはそれぞれの国の関わり方から描かれ方も異なり、それは「英雄史観」が色濃く残るイギリスの大英帝国戦争博物館から、その疑問視が進むフランスのノルマンディー地方の中心都市カンの平和記念館、そしてそのような解釈は不可能であるベルリンのドイツ歴史博物館までの展示の相違

にも表れている⁶⁾。

このことを踏まえたうえで、本論文で独仏国境地域における現代史を対象とした歴史博物館を取り上げる理由は2つある。1つは、国境地域における記憶の問題である。ヨーロッパ評議会やヨーロッパ議会がストラスブールに置かれていることが象徴しているように、かつて独仏国民国家間の係争地であった国境地域アルザスは、今日では逆にヨーロッパ統合の果実を最も享受しつつ、同時にまたかつての敵国間の橋渡しの役割を果たしているようにみえる。そこから、この地方、ひいては一般に国境地域の歴史は、まさに1945年を境に明転し、1989年以降拡大、加速していくヨーロッパ統合の歴史を象徴するものと想定することもできるかもしれない。しかし、実際にはドイツの「過去の克服」⁷⁾、フランスの「ヴィシー症候群」⁸⁾など、過去との批判的取り組みが国民国家単位で進められていくなかで、1945年まで他の地域よりも複雑な、あるいはより抑圧的な状況に置かれていた国境地域では、「記憶のアボリア」とも呼ぶべき状況が生み出されることになった。アルザスの場合、日本語にも翻訳されたF. オッフエの『アルザス文化論』(1951年刊)ですでにその予兆が述べられており⁹⁾、また半世紀経った近年の状況も、中本真生子によって紹介されている¹⁰⁾。本論文ではこれらに加え、最近の欧米での研究の成果をもふまえ¹¹⁾、さらに今後他の国境地域の同様の事例との比較考察を進めていくことを念頭に置きつつ¹²⁾、ヨーロッパ、国民国家、地域の三層構造のなかで、過去の記憶がどのように構築され、変容しているのかについて、アルザス・モーゼルの事例を考察することにした。

第二の点は、博物館というメディアについてである。「歴史」は社会にどのように伝達されるの



アルザス・モーゼル記念館 ©Mémorial d'Alsace-Moselle

かを考えるとき、これまで研究の焦点は主に歴史教科書に向けられてきた。誰もが通過する学校教育において使用され、その記述はそれぞれの国民国家の歴史意識を代表するものと見なされるがゆえに、歴史教科書において対立する解釈・記述は国際的な紛争の原因にもなり、あるいはその解決をめぐる対話が行われ¹³⁾、その進展のなかで上述の独仏共通教科書や他国間の共通教材も作成されてきた。しかし最近では、歴史と社会の関係をより多元的に分析しようとする傾向が強まってきている。それを象徴するかのように、この分野の世界的な中核機関であるドイツのゲオルク・エッカート国際教科書研究所の機関誌は、2009年に『国際教科書研究』から『教育メディア・記憶・社会』へと名称を変更している。むしろ、歴史教育の役割は過小評価されるべきではないが、他の歴史伝達のメディア、経路—テレビ、映画、小説、漫画、家庭内世代間対話など—とそれらの錯綜する相互関係についても考察していくことの重要性は、インターネットの時代を生きる私たちにとっては、ある意味直感的に知覚できることであろう¹⁴⁾。

こうした多元性、あるいは多元化に特徴づけられる「公共史（パブリック・ヒストリー）」において¹⁵⁾、歴史博物館はむしろ古典的なメディアに属する。その特徴は、展示物（兵器、手紙、日常生活用品、ニュース映像など）の「真正さ」、そしてその配置の空間的演出を通して、語られる歴史解釈に説得力を与えようとするところにある。近年では、後者に大きな力点が置かれるようになってきていることは、ダニエル・リベスキントによって設計されたベルリンのユダヤ博物館（1998年開館）などがよく示している。フランスでも、外観、入場口から出口に至るまで、それぞれの空間に意味が与えられた博物館が建設され、旧来の展示物とその解説の連続に終始するような構成からは大きく変化している¹⁶⁾。

歴史博物館は「信憑性」を強調する一方で、それは単純に学術研究としての歴史学の成果が大衆化される場として理解されるべきではない。とりわけこうした設計に趣向がこらされ、必然的に建設費用も高額となり、地域を越えた見学者層をターゲットとする博物館の場合—「アルザス・モーゼル記念館」もその一例である—、その建設の可否に当たっては、国や地域圏、県など公共団体の関与が財政的にも不可欠であり、その意向が大きな影響を与えることは言うまでもない。そこでは、展示される内容それ自体のもつ政治的性格もさることながら、地域振興の面、すなわち観光資源としての価値もまた、重要な役割を果たすことになる。そして建設が決定されると、博物館員、歴史家、演出家といった専門家が具体的な準備作業に携わることになる。他方、社会の側からは、とくに第二次世界大戦の場合、退役軍人会や迫害生存者の団体、ユダヤ教団体など、直接の当事者やその遺族、関係者が自らの主張の認知を求めて展示の目的や内容の可否をめぐる発言し、歴史家もこの世論における議論の中で「権威」としてしばしば動員されることになる。さらに「見学者」もまた、博物館のマーケティングのなかで想定されると同時に、開館後はとりわけその数の推移によって展示内容に影響を与えることになり、また記帳などによって批判を加える存在でもある¹⁷⁾。「記憶の場」としての歴史博物館は、こうした多様なアクターの相互関係から分析することが必要であろう。

以上の問題設定から、本論文ではまず、第二次世界大戦下のアルザス・ロレーヌとその記憶について概観する（第1章）。そのうえで、「アルザス・モーゼル記念館」の建設に至る過程を追う（第

2章)、その展示内容と演出について考察したうえで(第3章)、開館後の記念館に対する反響、政治的、社会的な役割について検討する(第4章)。この事例研究によって、歴史博物館というメディアが国境地域という文脈において果たす役割について、ひいては歴史認識の「ヨーロッパ化」の裏側にある複雑なプロセスについての視角の手掛かりを得ることが、本論文の目的である。

1. アルザス・ロレーヌの「過ぎ去ろうとしない過去」

1.1. 第2次世界大戦期のアルザス・ロレーヌ

1871年から1945年までの四分の三世紀の間、アルザス・ロレーヌは4度にわたり帰属する国家を変えることになった。それらはすべてドイツとフランスの間の戦争の結果であり(そしてその際これらの地域は繰り返し戦場となった)、その勝者がこの地域を領有することになった。すなわち、1871年にはフランスから成立したばかりのドイツ帝国に、第1次世界大戦後にはドイツからフランスに、第2次世界大戦勃発の翌年1940年にはドイツ領に、そして1944/45年連合軍によって解放されると再びフランス領に復帰し現在に至る¹⁸⁾。

こうして独仏両国の間で頻繁に帰属国家を変えることになったアルザス・ロレーヌは、たんなる戦利品としてだけではなく、両国の国民観念が結晶化したものであるとみなされた。普仏戦争時においてシュトラウスとルナン、モムゼンとフュステル・ド・クーランジュら両国知識人が「アルザスはフランスかドイツか」をめぐる行った論争において、言語・文化的ドイツ国民観念と、政治的フランス国民観念が提示される一方で、「敵国」の支配下において抑圧に耐えつつも、その「民族性」や「愛国心」を保持する住民という「殉教者神話」ともいべきイメージが敗戦国側で形成された。しかし同時にこのことは、領土を獲得した戦勝国側において、住民を潜在的な「内通者」とであるとみなすことと表裏の関係にあり、帰属国家の交替とともに統合への圧力が強まり、加速化していくことになる¹⁹⁾。住民の側からみれば、彼らは絶えず敗者となる側で戦い、戦後勝者の側に組み込まれ、その後国民としての忠誠心の証が問われ続けることになった。この点においては、ドイツとフランスの間の国民観念の相違とともに、両国の間で累進化する統合・同化政策の共通性も認識しておく必要がある。

1940年のナチス・ドイツによる併合は、一方でこのような急進化の頂点と位置付けることができるが、そこには大きな相違点も存在する。アルザス・ロレーヌでは、前年9月の大戦勃発とともに、国境線とマジノ線の間の無防備地帯の住民たちが約60万人という空前の規模でフランス南西部に集団疎開する一方、1940年6月のフランス降伏の後、ドイツの軍事占領下に置かれた北部、「ヴィシー政権」が成立した南部とは異なり、この東部地域はルクセンブルクとともに、ドイツ領として併合された。そして重要なことは、この併合が条約に明記された両国の合意事項としてではなく、一方的な形でナチス・ドイツによって実行されたということである。この一方的な併合、そしてヴィシー政権がそれを甘受したという事実が、アルザス・ロレーヌの人々の「棄民」としての犠牲者意識の根拠となるものであり、この点、以前の併合、あるいは戦前に国民投票という制度によって併合を選択したオーストリアの事例とは異なっていた。

「事実上」併合されたアルザス・ロレーヌは、第一次世界大戦前のドイツ時代のように一括して「直轄領」となったわけではなく、両地方はそれぞれ隣接する大管区に組み込まれることになった。そのため、それぞれの管区指導者（ガウライター）の方針の違いから行われた政策は必ずしも同じではない。とはいえ、これらの地域においてはいずれも、ユダヤ人、シンティ・ロマ、第一次世界大戦後移住してきた「フランス内地人」、共産主義者をはじめとする政治的反ナチ勢力など「非ドイツ分子」がフランスに追放（アルザスからは4万5千人、ロレーヌからは10万人）、あるいは疎開先からの帰郷が拒否される一方、フランス語、フランス文化が徹底的に排除された（地名、姓名のドイツ語化やフランス語使用、ベレー帽着用の禁止、フランス語図書の焼却、フランス期に養成された教員のドイツ内地での再教育など）。一方、ヒトラー・ユーゲントやドイツ少女団、国家労働奉仕団（RAD）などドイツ内地のナチ組織が導入され、ナチ・イデオロギーにもとづく「ゲルマン化」が進められることになった。これに反対、抵抗する者たちに対しては、その懲治施設として後に記念館が建てられるシルメックに「治安収容所 Sicherungslager」(1940年7月)が設置された。さらに翌年にはその収容者を動員して、治安収容所にほど近い山麓の保養地シュトルートホーフにナッツヴァイラー強制収容所が建設され、フランス、ベルギーからロシア、ポーランドなどヨーロッパ諸国から（支部も含め）総計46,000人が送り込まれ、採石などの強制労働に従事させられた。この収容所にはガス室も併設されている²⁰⁾。一方、1942年以降、「親仏分子」を直接ドイツ本土の収容所に移送し、「再教育」する傾向も強まった²¹⁾。

1942年における東部戦線の膠着とドイツ軍の戦力消耗は、それまでもっぱら志願制に依拠していたアルザス・ロレーヌからの兵士動員を義務化へと移行させることになった。併合当初アルザス・ロレーヌの人々のドイツに対する忠誠心、そして兵士としての信頼性に疑念を持っていたことを示すものでもあるが、兵力不足の問題はこうした懸念を後景に追いやることになった。同年8月にはすべてのアルザス・ロレーヌの住民に撤回可能な形でドイツ国籍が付与されるとともに、最初の召集が行われた²²⁾。結局アルザスからは1908～1928年生まれの21年次分、ロレーヌでは1914年～1927年の14年次分が動員された。戦争末期の1944年になると、その一部が武装親衛隊に編入されることになった。国防軍だけではなく、武装親衛隊にも強制召集されたことは、後者がナチスの戦争犯罪を体現しているとみなされただけに、戦後大きな問題となる²³⁾。こうして動員された兵士の数は約13万人（アルザス10万人、ロレーヌ3万人）であったが、そのうち32,000人が戦死し、行方不明者が10,500人を数え、3分の1が生きて故郷の土を踏むことはなかった。後者の多くはソ連のタンボフでドイツ兵の捕虜として収容されていた者たちであったが、生き残った兵士の帰還も外交上の問題もあり、1955年まで続くことになる。

1. 2. 戦後の「粛清」

1944秋に連合軍がアルザス・ロレーヌに侵攻し、ドイツ軍の反撃を受けつつもメッス、ストラスブール、コルマルなどの諸都市を次々に解放するとともに、「対独協力者」に対する制裁、すなわち「粛清 épuration」が始まった。すでに先行していたフランスの他の地域と同様、制裁対

象者にナチのシンボルなどを着用させたうえで街路を引きずり回したり、広場でドイツ人と関係を持ったとされる女性を剃髪するなどの行為がみられたが、問題は前節で述べたように、占領ではなく併合された地域において、「対独協力」とそれに伴う加害行為をどのように認定し、裁くかということであった²⁴⁾。

アルザスにおいては、大管区指導者ヴァーグナーの裁判とともに、ナチス幹部となった地元の政治家たち—その多くは両大戦間に自治主義者あるいは分離主義者であった者たちであったが—の審理も行われ、ミュールーズ郡長であったムレルは死刑判決の後処刑され、他の被告たちも禁固刑や欠席裁判のなかで死刑判決を受けている。こうした上級幹部の政治家の他にも、「戦時利得者」や教員ら下級公務員、聖職者などが追及の対象となり、そのなかには根拠のない密告によるものも少なくなかった。ナチの抑圧の象徴であったシルメックやシュトルートホーフの収容所は、今度是对独協力容疑者の収容施設となり、それらをはじめ、アルザス全体で逮捕・拘留された者の数は12,000人に及んだ。ただし、アルザスにおける訴追件数は約18,000件であり、他のフランス地域と比べ際立って多かったことは事実であるが、そのうち8,000件は根拠不十分として却下され、実際に有罪判決を下されたものは1,450件であり、その刑罰の程度は相対的に低いものであったといわれる²⁵⁾。

しかし、アルザス・ロレーヌにおける「粛清」には、純粋に不法行為に対する制裁という司法的側面とともに、これらの地方を最終的にフランスへと統合する、言い換えれば、ドイツの痕跡を洗い流し、フランスへの帰属を決定的にしようとする政治的意思が強く働いていた。そのため、自治主義者たち—とりわけ教員、聖職者など地域社会において政治的影響力をもつ知識人—が標的となった。実際には、ナチスへの協力の過去によって自治運動は戦後弱体化していたが、フランス政府内部においては、戦間期の記憶に由来するその「亡霊」への懸念はその後長く尾を引くことになり、アルザスにおけるヨーロッパ志向の言説はしばしば自治主義のカモフラージュとみなされた²⁶⁾。

「ナチスの5年間は戦間期の20年間に及ぶフランス時代よりも、アルザスのフランスへの統合に寄与した」としばしば言われるが、実際それは間違っていない。しかし、戦後直後の「粛清」は社会を分断するものとなり、すでに当時においても失敗であるとみなされていた。バ・ラン県の県知事は1946年の報告において、「大いに有罪である行為と、たいして有罪ではない行為を区別することはきわめて困難となった。(…)このような状況は、公権力による行動〔＝粛清〕を得策ではないものとし、弱点を作りだし、少しずつ粛清に対する敵対的な反応を生み出すだけであった。(…)粛清は将来、政治的な面で『時限爆弾』となる可能性もある」と述べている²⁷⁾。戦後初期のアルザス・ロレーヌでは、たしかにフランスへの帰属意識が強まり、また強められたが、その一方で、繰り返し突き付けられる忠誠心の踏み絵に対する苛立ちや疲労もまた確認することができる。

1. 3. ボルドー裁判 (1953 年) とその後

「粛清」が一段落することで、1940年代末にはアルザス・ロレーヌ社会は次第に落ち着きを取り戻していったが²⁸⁾、1953年に行われたいわゆる「ボルドー裁判」は、再び大戦期の過去が問題とされ、

アルザスと「フランス内地」の意識のずれや対立が表面化することになった。

ボルドー裁判とは、1944年6月10日に起こったナチス武装親衛隊「ライヒ」師団の部隊がフランス南西部リムーザン地方のオラドゥール村を急襲し、住民642名を虐殺した事件を裁くための裁判であった²⁹⁾。多くの女性、子供が教会の中で焼き殺されるというその残虐性もあり、1945年3月にはド＝ゴールがオラドゥールを訪問し、オラドゥールの悲劇はフランス国民全体の悲劇であると言明した。フランス政府は廃墟となった村をそのまま「遺産」として保存することを決定し、こうしてこの事件は、「罪なきフランス人に対するナチスの蛮行」として、戦後のフランスにおけるヴィシーの記憶の抑圧と、「レジスタンス神話」形成の一翼を担うことになる。

しかし、その後、虐殺の実行部隊に多数のアルザス兵が含まれている事実が明るみになることで、この問題は国民的記憶と地域的記憶の対立を引き起こすことになった。実際、「ライヒ」師団の実行部隊には31人のアルザス人が従軍しており、その大半が当時20歳以下であった。そのうち戦争を生き残った者は14人であり、うち志願兵が1人、それ以外は強制召集された若者たちであった。彼らに対する司法の追及は、1948年に戦争犯罪に対する集団責任を遡及的に適用する刑法の改正が行われたことによって可能となった。すなわち、これによって挙証責任は原告の側ではなく、被告の側に課せられることになったのである³⁰⁾。

1953年にボルドーの軍事法廷に引き出された被告21人のうち、その3分の2がフランス国籍の、あるいは再びフランス人となったアルザス人であった。その一方で、「ライヒ」師団長ラマーディンクは西ドイツに留まり、また将校たちの多くも戦死あるいは潜伏するなど、被告たちからみればきわめて不公平な裁判であったが³¹⁾、原告側にとっては彼らもまた実行犯であることには変わりはなく、犯した罪に応じて厳罰に処されるべきであると考えられた。

10万人が強制召集兵として動員されたアルザスでは、ボルドーの法廷に立たされた被告たちは、もしかしたらそれが自分の息子、兄弟、友人であったとしても不思議ではなかったと多くの者に受け止められ、この裁判はまさにアルザスそのものを裁くものであると見なされた。被告たちの弁護人は、「この若者たちは我々の悲劇の生ける化身である。(…)642人のリムーザンの虐待された人々の阿鼻叫喚の背後には、何千ものアルザスの被害者たちの叫び声が反響しており、永遠に反響し続けるであろう」として、オラドゥールの虐殺の犠牲者と強制召集兵を同等のレベルの被害として対置しようとした³²⁾。しかし強制召集兵に対して5～8年の禁固ないし懲役刑が科せられると、アルザスの世論は沸騰し、各地で記念碑広場や教会などで抗議の集会、デモ、ミサが開かれた。

こうした強い抗議の声と、アルザスの議員たちの働きかけによって、フランス下院では判決の4日後に恩赦の決議を行い、これによって強制召集兵の有罪判決者たちは刑期をほとんど務めることなく釈放され、また死刑判決を受けた2名（うち1名はアルザス出身の志願兵）も5年後には自由の身となった。これに対し今度はオラドゥール、そしてリムーザン地方の世論が沸騰し、レジョン・ド・ヌール勲章の返上や、毎年の追悼式典への政府代表の招待を見合わせるなどといった形で強い抗議の意思が示された。とりわけ廃墟のまま保存された旧オラドゥール村の入り口には、2つの銘板が置かれた。その1つは恩赦法に賛成票を投じた議員の一覧が、もう一方には恩赦によって釈放

されたアルザスの13人の強制召集兵たちの名前が「これら犯罪者たちは自由の身である」の警句とともに刻まれていた³³⁾。まさにオラドゥール、そしてリムーザン地方の怨恨の強さを示すものであり、共産党が強力な地盤をもつ（当時のオラドゥール町長も共産党員であった）この地方と、ゴーストが優位に立つアルザス地方の政治的な相違もまた、地域間対話を一層困難なものとした。

一方、アルザスでは恩赦はたしかに事態の鎮静化をもたらしたが、有罪という事実を否定するものではなかったこともあり、問題が解決したわけではなかった。戦後すぐに「脱走兵・強制召集兵協会 ADEIF」などの団体も結成され、ボルドー裁判において最も積極的に被告たちを擁護する一方、強制召集兵の待遇を他のフランス退役軍人と同等にするための運動を展開した。また強制召集兵の回想録が次々に出版されるようになったが、そこでは長らく、そして少数の例外を除き、フランス愛国心が強調され、ドイツ軍におけるアルザス兵たちの置かれた境遇、そしてソ連の捕虜収容所の悲惨な生活が描かれ、犠牲者としてのアルザス強制召集兵のイメージが支配的であった³⁴⁾。犠牲者としての認知を求める声は、自分たちの体験が誤解されている、あるいは知られていないことへの苛立ちでもあった。実際、アルザス・ロレーヌがもはや独仏両国間の桎梏でなくなると、両国の歴史教科書においてこの国境地方についての記述は減少し、そこではむしろなぜ強制召集兵が存在したのかということについての説明も与えられなかった。皮肉なことに、独仏関係が落ち着くとともに、それまで両国のナショナリズムの格好の題材であったアルザス・ロレーヌへの関心も減退していったのである³⁵⁾。

しかし、アルザス・ロレーヌ社会全体としてみるならば、第二次世界大戦はむしろ触れざるべき記憶となっていった。ジェルマン・ミュレールの代表的な「方言劇」である『それについて語るのはもうよそう Enfin..., redde m'r nimm devun』(1949年)が象徴するように、犠牲者の自己理解の一方で、併合地域としての不可避的なナチ体制とのかかわりは、「うしろめたさ」として自己抑圧されていくことになった。1968年世代の地域主義者である歌手ロジェ・シフェールは、1997年、極右国民戦線の台頭に対抗する「ストラスブール・アピール」に寄せた一文において、「みんなが不本意召集兵だったのか」と問い、「50年来ドイツ人たちは自らに鞭を打ち、(…)永遠の良心の呵責を実践している」のに対し、アルザスでは「パパとママは戦争の時何をしていたの？」と問うても「答えはない—答えはない—答えはない」と述べている³⁶⁾。引き合いに出されたドイツの「過去の克服」については過大評価もあるにせよ、この発言はアルザスにおいて犠牲の記憶とタブー化の圧力を示すものである。この点さらに示唆的なのは、ナチ武装親衛隊のみならずドイツ国防軍自体も戦争犯罪に関与したことを示し、「清潔な軍隊」としての「国防軍神話」に打撃を与え、ドイツ国内で大きな論争となった「国防軍の犯罪展」(1995年、2000年)が、アルザスにおいては他国の出来事として報道されただけであり³⁷⁾、自らの強制召集兵の戦争体験の問い直しには繋がらなかった、ということである。

ドイツとの関係についても、アルザスの立場は両義的であった。一方で自らの未来を独仏和解に求めるなかで、終戦直後から主に教会組織などが政府に先行して慈善的交流活動を展開していたことは確かである³⁸⁾。しかしまた、自らにおけるドイツの要素の否定、自治運動の嫌疑を掛けられる

ことの忌避といったメンタリティーは、ドイツと距離を取ることを促すことになった。たとえば独仏和解・友好の指標の1つである姉妹都市関係の締結においても、アルザスは当初他の地方よりも消極的であり、中心都市ストラスブールが南西ドイツ、バーデン・ヴュルテンベルク州の州都シュトゥットガルトの姉妹都市になるのは1962年のことであった³⁹⁾。さらに、翌1963年の独仏友好協力条約の前提となる西ドイツの対仏一括補償(1960年)では、強制召集兵に対する補償は対象外であった。この問題については最終的に1981年に「独仏友好財団 FEFA」が創設され、支払いが決定されるが、それも両国国境の「ムンダートの森」の帰属問題をめぐって延期された。そして支払いは1984年になってようやく開始されたが、これに対し ADEIF は、「ドイツの良心は目覚めることはないのか」と激しい不満を表明した⁴⁰⁾。また、独仏友好協力条約の年にドイツのアドルフ・テプファー財団によって両国の相互理解に資する学術研究を表彰するために創設された「ストラスブール賞」も、財団創設者テプファーのナショナリストの過去、ナチ時代におけるアルザス自治・分離運動とのつながりが表面化すると、1997年にストラスブール市が財団との協力を拒否し、同賞は廃止された⁴¹⁾。それは戦後半世紀がたち、次章で扱う記念館建設運動がまさに出てくる時期でもあった。

2. 記念館建設への道程

2.1. 計画の端緒

記念館設立の動きはいつ、どこから出てきたものであろうか。記念館の公式ガイドブックによれば、イニシアチブはバ＝ラン県議会によるものであり、決断は当時同議会議長であったフィリップ・リシェール(UMP、現アルザス地域圏議会議長、上院議員)であったと述べられている。同時に同書には、1990年代末に歴史記念館設立の動きが出てきたとも指摘されている⁴²⁾。

アルザス最大の日刊紙である『デルニエール・ヌーヴェル・ダルザス』(DNA)紙の過去の記事を検索してみると、こうした動きの最初のものとして、1996年10月に開催されたフランス兵士・戦争犠牲者協会連合(UFAC)のバ＝ラン県支部の会合において出された動議が挙げられる。そこでは、以下のように述べられている。

「折に触れ、我々は、第二次世界大戦から50年間を経た今日、強制召集兵たちの悲劇と我々が地域の歴史が依然としてきわめて誤解されていることを目の当たりにする。この状況を打開し、歴史の真実のより良い認識に貢献するために、我々は、第二次世界大戦におけるアルザス・モーゼル地方の状況がフランスの学校カリキュラムのなかで特別な発展の対象となり、国はナチズムの犠牲となったアルザス・モーゼルの人々すべての記憶を保持する回想の記念施設の建設のため、アルザスの地方自治体に援助をすることを要求する。」⁴³⁾

さらにその約半年後の1997年5月8日、第二次世界大戦終戦記念日の同紙には、ルークやボルドー裁判の歴史にかんする専門家である J-L・ヴォノー(当時ストラスブール大学教授)が記念館

について、展示内容についての具体的な提案を行っている。彼もまた、「アルザスとモーゼルの人々は早急に記憶の場を必要としている」とし、「我々は〔祖国フランスに対する一西山〕裏切り者の集合的責任を負わなければならないのであろうか」と問いかけつつ、記念館の設立によって沈黙からの脱却を促し、「今こそあらゆる〔ナチス・ドイツ支配下のアルザス・ロレーヌの歴史に対する〕疑念を晴らす時である」と説いている⁴⁴⁾。

こうした地域世論の高まりを受けて、パリの政府の側でも、ジョスパン政権で退役軍人庁長官を務めるロレーヌ出身のジャン＝ピエール・マスレ（社会党）が1998年1月にストラスブールにおいて関係者（独仏友好協会理事長、退役軍人会幹部、歴史家）らと会談し、国家による財政支援を約束する一方で、主導権はあくまでも地域の側が握るべきであるとした⁴⁵⁾。これを受けて、上述のように同年バ・ラン県県会議長に就任したリシュールは、記念館建設に本格的に乗り出すことになり、同年歴史家アルフレッド・ワール（当時メッス大学教授）を委員長とする学術委員会が立ち上げられ、展示内容について検討、準備を進めることになった⁴⁶⁾。一方、2000年1月には建設の財政的な主体となるアルザス・モーゼル記念館合同理事会が結成され、建設計画は本格的に始動することになる。

2. 2. 記念館建設の背景—1990年代における内外の情勢の変化

これらの組織の活動、性格については後述するとして、ここでは1990年代後半において、なぜ記念館建設を求める声が高まり、また政治の側がそれを受け入れたのか、という点について考察しておきたい。

まず、アルザス・ロレーヌに限らず、第二次世界大戦の記憶全般について言えることとして、当事者世代の高齢化が挙げられる。1990年代になると、戦争に動員された世代は最も若くてもすでに60歳を超え、定年退職して自由な時間がもてるようになる一方で、それに伴いこれまで口をつぐんできた当時の過去について、「生きているうちに」自分たちの、そして生き残れなかった同世代の仲間の苦難の歴史を記憶に刻み、それを若い世代に伝えておきたい、という意欲が高まることになった。このような動きは個別にはすでに1980年代半ばから見られたが⁴⁷⁾、1990年代になると一層、アルザス・ロレーヌ地方において、前節の動議などが示しているように、まさにそれまで否定されてきた名誉回復としての意味をもつことになった。

もちろん、こうした名誉回復と認知の要求は、これまで支配的であった沈黙の背後にある「後ろめたさ」という心理的障壁が除去される、あるいは少なくとも大きく低下することが前提となる。すでに言及した1970年代から80年代にかけてのフランスにおける「レジスタンス神話」の崩壊は、90年代に入り、大統領フランソワ・ミッテランの戦前やヴィシー時代の過去に注目が集まり、またモーリス・バボン裁判の審理が開始される（1996年、翌年有罪判決）など、さらに進行した。なかでも1995年にミッテランの後任となったジャック・シラクは、ユダヤ人移送をめぐるフランス国家の責任を認める演説を行ったが、それは、これまでヴィシー政権に国家としての法的正統性を一切認めてこなかったド＝ゴール派の記憶政策とは一線を画すものであると同時に、記憶の

焦点が抵抗の英雄から犠牲者へと移ることも意味していた⁴⁸⁾。それは、棄民＝犠牲者としての立場を強調するアルザス・ロレーヌの支配的な歴史認識にとっては、有利に働くものであったことは確かであろう。

こうした動きが地域の政治家によって取り上げられたことを、政治的打算としてのみ理解することは短絡的である。何よりも、地域の政治家たちのなかには、上述のリシェールやストラスブール市長ローラン・リース（社会党）のように、自身が不本意召集兵を父に持つ者が少なくなかった。とはいえ、それとともに指摘しておくべきことは、とりわけアルザスが地方分権を推進するなかで、これまでの「後ろめたさ」を克服する必要が認識されていたことである。その中心人物であるリシェールは、「すでに1951年にその注目すべき『アルザス文化論』においてフレデリック・オッフエが語っていたアルザス人のコンプレックス」は、自制心という点では積極的に評価でき、誇りにすることができる性格も含んではいるが、「競争の世界において、地域、あるいはその責任者が断固とした態度を取らず、自らの意思を通さなければ、その長所を引き出す機会ほとんどないであろう」と述べている。彼にとって、このコンプレックスの原因はまさに20世紀のアルザスの歴史に対する誤解と無知—「フランス内地」だけではなく、地元アルザスの若年世代を含め—にあり、記念館はまさにこのような「誤解」や「無知」に対抗する制度的拠点となることが期待されたのである⁴⁹⁾。県 Département と地域圏 Région の錯綜した関係を整理しつつ、地域圏議会への統合によって分権化を進めるうえで、過去の問題は地域アイデンティティの主要な柱の1つとして重視されたのである。

さらに、冷戦終結、ヨーロッパ統合、ナショナリズムの台頭といったフランス国外における国際情勢の変化もまた、アルザス・ロレーヌの過去により普遍的な「教訓」としての可能性を与えるものとなった。「コンボからの難民の姿を目にして、アルザスとロレーヌのかつての被追放民、避難民、脱出者たち、そして事実上の併合に対して反抗する愛国者たちは、60年前に自らの生活の地から逃れた別の住民の悲劇を思い起こすであろう。すなわち、42万人のアルザス人とモーゼル人たちのことである」という1999年のDNAの記事にもあるように⁵⁰⁾、東ヨーロッパ、とりわけ旧ユーゴスラヴィアにおける民族紛争が、第2次世界大戦までのアルザス・ロレーヌの状況と類似するものとみなされた。さらに2000年に記念館建設計画推進のため設立された「友の会」(AMAM)の初代会長となるジャン＝ルイ・アングリシュは、自らが編集長を務めたDNA紙上において、記念館を「解放された記憶の場」であるとし、その哲学として、「1871年以来、とりわけ1939～45年の時期に経験した状況の無数のモザイクを再構成する意思を持つ地域の記憶の場」であると同時に、「一般的な記憶の場として、ヨーロッパの1世紀〔＝19世紀半ば～20世紀半ば、西山〕をよりよく説明する」場であるとし、地域の特殊性にヨーロッパの普遍性が表れていると主張している⁵¹⁾。

一方で、この時期のアルザス・ロレーヌ地方の戦争の記憶の再活性化にとって、より直接的な影響を与えることになったのが1991年のソ連崩壊である。というのも、ドイツ軍の強制召集兵としてソ連の捕虜となったアルザス・ロレーヌ出身の兵士たちが収容されていたタンボフ（モスクワとヴォルゴグラード〔旧スターリングラード〕のほぼ中間地点に位置する）は、東西対立の冷戦期

においては、アルザス・ロレーヌの人々にとってアクセス困難な「記憶の場」であった。それが1991年のソ連崩壊以降、6000人以上に上る同地に眠る捕虜たちのもとに墓参、慰霊に赴くことが可能になったのである⁵²⁾。1995年には、2人の元捕虜のイニシアチブによって「タンボフ巡礼協会」が結成され、同協会は同年9月に地域圏議会議員で元上院議員のアンリ・ゲッチー（MRP）やカトリック、プロテスタント聖職者を含む99名の「巡礼者」からなる最初のタンボフ訪問を実現している⁵³⁾。

この巡礼協会はたんなる元捕虜、遺族たちの参詣だけではなく、青少年の参加も積極的に推進しており、記憶の継承を強く意識したものであった。実際、1995年の最初の訪問に参加した若者たち（約20名）のイニシアチブによって、タンボフ郊外のラーダの森の収容所跡地に記念碑の建立が提案されると⁵⁴⁾、1997年にフランス政府の関係者として初めて同地を訪問した退役軍人庁長官マスレは、ドイツ戦没者埋葬地管理援護事業国民連盟VDKの財政支援を取り付けた。その結果、日本を含む8か国の兵士が捕虜となっていた旧タンボフ収容所を国際的な記念施設とするに当たり、「フランス・スクエア」を設け、そこに個別、そして集合の墓標（後者は、アルザス出身の芸術家トミ・ウンゲラーの二重の十字架の墓標の画をもとにした）、さらにヴォージュ山脈で切り出した石から造られた石碑が設置された⁵⁵⁾。その完成後、1998年には、アルザス・ロレーヌ地方の3県の県議会議長がそろって訪問し、追悼の式典が開催されている。

1998年1月、ストラスブルグにおいてマスレとVDK会長ハンス・オットー・ヴェーバーの間で協定調印が行われたその日、前節末尾で述べたように、マスレは記念館設立の関係者とも面談を行っている。協定調印の場において、マスレは、タンボフの記念碑建立が「元捕虜の人々がまだ生存している時期に実現したことを喜ぶ」とともに、「強制召集兵のフランス史への再統合」という「異なる次元の企画」のために、「遅れることなくあらゆる善意を動員しなければならない」と述べている⁵⁶⁾。まさにこの発言が示すように、ロシア、ドイツとの協力の中で実現したタンボフの記念碑という遠隔の記憶の場は、フランス史のなかでアルザス・ロレーヌの歴史の認知を目的とする地元の記念館の設立へと展開していくことになる。

2.3. 「犠牲者間の競争」と和解

1980～90年代におけるフランスの現代史の記憶の動揺、変化は、まさに冒頭で述べた歴史博物館の増加の原動力であった。それはまた、分権化が進むなか地域による文化観光政策の一面でもあった。ノルマンディー地方のカーン平和記念館（カルヴァドス県、1988年）、ペロンヌ第一次世界大戦歴史博物館（ソンム県、1992年）、オラドゥール平和記憶センター（オート・ヴィエンヌ県、1998年）といった、この時期建設される代表的な現代史の博物館の多くは、県や地域圏のイニシアチブによって設立されている。前述のように、アルザス・モーゼル記念館もまたバ・ラン県の主導によって建設されることになるが、時期としてはむしろ後発であり、ワールも1999年に「アルザス・モーゼルは記念館のない唯一の〔フランスの〕地方である」と述べているが⁵⁷⁾、それはまさに第二次世界大戦の過去の扉を開くことに対する逡巡の表れともいえよう。

先行する他地域の現代史博物館は、アルザスにおいて自らの悲劇的な過去の認知要求を刺激する一方で、それは2つの課題を突き付けることになった。1つは「ボルドー裁判」以来の「記憶の冷戦」というフランスにおける地域間の対立を克服することであり、もう1つは地域内における異なる記憶の「序列」の問題であった。

前者については、まさに平和記念センターが設立されるオラドゥールとの関係が問題になるが、この点についても、「タンボフ巡礼協会」の活動が起点となっていた。1997年末に協会会長のシャルル・ガンツェールがオラドゥールを訪問し、オラドゥール町長レイモン・フリュージェールとの面談において、翌年復活祭におけるアルザスの青少年たちによる訪問が取り決められたのである⁵⁸⁾。この訪問には12人の若者たちが参加し、ガンツェールとオラドゥール事件の遺族会である「犠牲者家族全国協会」会長であり、虐殺を生き延びた6人の一人であるジャン＝マルセル・ダルトゥーも同行するなか、村役場での歓迎式典の後、廃墟の見学や現地の若者たちとの討論が行われた⁵⁹⁾。そして若者たちの宿泊もホテルではなく、あえて犠牲者の遺族の家庭においてであった。その遺族の一人であり、現在オラドゥール村の助役であるブノワ・サドリー（当時21歳）は当時を回想して、「私たちは語り明かした。それは多くのことを議論する機会だった。それまで双方がお互いのことをほとんど知らなかった。境界を飛び越えるのはとても興味深い体験で、私たちは週末を通してお互いに理解を深め合った。翌年私はアルザスに行き、私たちの交流はその後何年にも渡って続くことになった」と述べている⁶⁰⁾。

「真の交流というものは、草の根から育まれるものである。私たちはこの最初の招待に国会議員や県知事などの参列は望まなかった」というフリュージェールの発言にもあるように⁶¹⁾、対話の試みが民間から出たものであったことは注目に値する。そしてそこからオラドゥールとストラスブール市の交流も始まり、同年4月にはフリュージェールがストラスブール市長ローラン・リースにより招待され、6月10日のオラドゥール追悼式典にリースがアルザスからの来賓として参加することになる⁶²⁾。そして翌1999年7月17日のオラドゥール平和記憶センター落成の式典には、リースとともにその前任者カトリーヌ・トロートマンが文化相としてシラクとともにフランス政府を代表して参列し（この日—1942年にフランス警察によりユダヤ人大量検挙が行われた「ヴェル・ディブ事件」の日—、首相ジョスバン自身はアウシュヴィッツを訪問していた）、ストラスブール市からは3つの立像が贈られている⁶³⁾。さらに2004年には、60周年追悼式典にストラスブールから市長と総司教が参列する一方、フリュージェールがストラスブール市北郊シルティカウムを訪れ、「二重に忘却された」9人の同地出身の犠牲者の名前を読み上げ、追悼している⁶⁴⁾。このように、アルザス・モーゼル記念館建設計画と並行して、オラドゥール、リムーザンとの交流と和解が大きく前進したことは確かである。

ただし、和解が摩擦なく進んだわけではないことは、ボルドー裁判から対話まで40年以上かかったことを考えれば驚くべきことではなからう。たとえば、平和記憶センターの落成式典の報道に対して、『デルニエール・ヌーヴェル・ダルザス』（以下DNA）紙には読者から多くの投書が寄せられ、センターの展示においてなぜそもそも強制召集兵が存在したのかという背景や、彼らの多くが当時

18歳以下であったということ、また親衛隊からの脱走兵も少なくはなかったことなどが言及されていないことについての批判や、パリのメディアにおいていまだ「自称マルグレ・ヌ」といった侮辱的な報道が行われることへの抗議の声が上がった。ある読者は、「たしかにアルザスとリムーザンの和解に向けての大きな一歩が踏み出された。しかし、『古いフランス』の私たちの同胞たちがいい加減、1940年6月の敗北の破滅的な帰結、すなわちアルザスとモーゼルのドイツによる事実上の併合を認めるために、いまだ多くのことがなされなければならない」とし、そこで計画中のアルザス・モーゼル記念館は見学者に「東部の県の住民たちが経験した悲劇をよりよく理解することを可能にする、歴史的な厳格さのモデルとならなければならない」と記している⁶⁵⁾。ここにもまた、和解への取り組みとともに、そのプロセスにおける地域の歴史の認知不足の再確認が、記念館建設を後押ししていることを見て取ることができる。こうしたなかで、対話を進めるストラスブール市長リース自身も、その目的は集団的責任を意味する謝罪ではなく、あくまで和解であると強調した⁶⁶⁾。

その一方で、第2の点、すなわち、アルザス・ロレーヌにおける第二次世界大戦の記憶が決して一枚岩ではなかったことも看過してはならない。ここまで見てきたように、とりわけアルザスにおける戦争の記憶の焦点となっていたのは強制召集兵であったが、上の投書にもあるように、彼らのなかにも脱走した者もいれば、しなかった者もいた。また抵抗運動に参加した者、政治的、人種的に迫害された者たちがおり、その対極にある対独協力者のなかには一ドイツ本国と同様に一積極的加担者から同調者、傍観者まで、さまざまな動機をもった「協力」の仕方があり、またそれは同一人物でも時期によって変わりうるものであった⁶⁷⁾。1940年のフランスの敗北と、フランスによるアルザス・ロレーヌの「見殺し」を過度に強調することは、こうした多様性を「国家の犠牲者」のもとに抹消する可能性を孕んでいた。実際、ユダヤ教会の側からも、ストラスブール・バ＝ラン県の大ラビであるギュートマンが、「すべての強制召集兵が、親衛隊の制服を着た者たちも含め、フランスのために亡くなったなどと、誰も強制収容所で亡くなったユダヤ人の子供たち—彼らもまた不本意 Malgré-nous であった—のためにそのようなことを要求していないのに、果たしていえるのだろうか」と述べ、記念館の展示内容について強い危惧の念を表明した⁶⁸⁾。

この点とくに注目すべきは、アルザスにおけるユダヤ文化の専門家であり、記憶と忘却についても多くの論考がある社会学者フレディ・ラファエル（当時ストラスブール大学教授）の発言である。彼は1999年末の全国紙『リベラシオン』のインタビューにおいて、「全体主義体制において、監視や強制参加によって人々は何もすることができず、あらゆる責任を失っているというまことしやかな神話から脱却しなければならない。オーストリアにおいて養われたのは、まさにこうした身のかわし方であり、そこでは繰り返し、自分たちはアンシュルス〔1938年のナチ・ドイツによるオーストリア併合〕の犠牲者なのだと思い起されてきた」と指摘し、「アルザスでナチ体制が効果的に機能することを可能にした甘い見通しの日和見主義や、きわめて活発であった対独協力、密告者たちの態度の歴史が書かれなければならない」と主張している⁶⁹⁾。さらに、アルザス・モーゼル記念館は、「アルザスの住民を構成するすべての要素が記憶されるものでなければならない」とし、強制召集

兵のみならず、徴兵忌避者、レジスタンス（ラファエルによれば、アルザスにおいて強制召集兵の影に隠れた彼らこそが「記憶の否定」の真の犠牲者であった）、追放・抑留者なども含まれることを主張した。

ラファエルはここで、何のために記憶されるべきかという根本的な問題を提起している。「過去が現在の世代にとって意味を成し、彼らに現在の課題に向き合うことを助けることで、初めて記憶の伝承は可能となる」、と彼は言う。その念頭にあるのは、アルザスにおいて全国平均以上の勢いで台頭する極右国民戦線であった⁷⁰⁾。つまり、これまで語られてこなかった「暗部」を語ることによって、現在の人種主義や排外主義に対抗する教育的な目的を満たすことができるというのが、彼の主張であった。このような立場は、慰霊や認知要求と強い緊張関係をもつことになるのは明らかである。

この緊張関係の象徴的な事例として、ある「スキヤングル」が挙げられる。記念館落成の一年前の2004年6月、ストラスブール南郊のイルキルシュ・グラーフエンスターデンにおいて、「町おこし」の一環として、19世紀以来この地の中心企業であったアルザス機械製作会社SACMが1943年に製造した蒸気機関車を、「工業化の遺産」として市の中心部の広場に設置するという計画が市議会によって承認された。しかしその計画が公になると、ナチ併合下において製造されたという過去に加え、クロード・ランズマンの『ショアー』によって定着した鉄道・機関車＝ユダヤ人の強制収容所への移送の象徴から反対の声があがり、結局半年間にわたる議論の末、この機関車の購入は断念された。ストラスブールでトロートマン、リースの二人の社会党市長を補佐したジャン＝クロード・エルゴットは、ナチ時代の機関車の購入計画が極右ではなく、社会党の市長の提案によるものであったことに注目し、アルザスにおける反ユダヤ主義の連続性（フランス革命期や1848年革命期など）と、それに起因する人種主義、排外主義に対する感受性の弱さを指摘している⁷¹⁾。

このように、「犠牲者間の競争」（ジャン＝ミシェル・ショーモン）と、その調停、和解の試みが併存、錯綜するなかで、アルザス・モーゼル記念館は設立されることになる。

3. 記念館、展示内容とその演出

3.1. 準備・学術委員会の構成と施設の名称

前章で述べたように、アルザス・モーゼル記念館設立においては、統括的な役割を果たす合同委員会に先立って、博物館の展示内容にかんする枠組みを検討する準備委員会が組織され、その委員長にはアルフレッド・ワールが就いた。ワールはロレーヌのメッス大学教授であったが、アルザス出身であり、またアルザス近現代史の専門家（さらにサッカー史の専門家）として知られ、1984年、退役軍人庁のイニシアチブによって開催されたフランス解放40周年を記念する歴史展示においても学術面での監修責任者を務めていた⁷²⁾。歴史家としては、さらに前述の地域史家であり、記念館建設をDNA紙上において提言したヴォノーも加わっていた。彼は地域史家であると同時に、県議会、地域圏議会の議員（当初ゴーリストのRPR、のち中道無所属）でもあり、郷土史に強い関心を持つ政治家アルフォンス・トレストレル（当時ロセーム町長、バ・ラン県議会副議長、中道派）

とともに⁷³⁾、学術と政治の間の橋渡しの役割も果たしていたと考えられる⁷⁴⁾。

準備委員会、そして建設決定後も展示内容を学術的に監督する学術委員会の陣容において特徴的なのは、メンバーが地域関係者によって占められていることである。このことは、これまで述べてきた経緯からすると一見当然のように思われるが、たとえばカーンのノルマンディー平和記念館やオラドゥールの平和センターなどの場合、前者には「ヴィシー・シンドローム」の研究者として著名なアンリ・ルソーやドイツ人歴史家シュテファン・マルテンスがおり、後者には社会運動史のマドレーヌ・ルベリュー、また「感性の歴史家」として日本でも著名なアラン・コルバン、フランス現代史の泰斗ロベール・フランクら、パリをベースとして活動する「全国的な歴史家」も参加している⁷⁵⁾。より印象的なのは、アルザス・モーゼル記念館と同時並行的に改装が進められていた、ストルトホーフの強制収容所記念館の学術委員会には、ワールが参加していたものの、それ以外はアルザス・ロレーヌ地方とは直接関係ないメンバーが多数を占めていたことである⁷⁶⁾。ストルトホーフの場合、フランス政府の管轄下にあり、また収容されていたのも地域外出身者がほとんどであったこともあるが⁷⁷⁾、このようなメンバー構成の相違は、アルザス・モーゼル記念館がアルザス人によって描かれる歴史像であることを強く意識したものであり、見方によっては地域史の「閉鎖性」を示唆するものでもあった。

実際、アルザスの歴史は、近年のナショナリズム研究のなかでも注目を集め、かつての係争国ドイツのみならず、英米の歴史家による研究も行われている一方⁷⁸⁾、「地域史研究」自体についてはむしろ閉鎖的な側面も存在する。ヨーロッパ統合と並行して国境地域圏でのさまざまな協力体制が構築されるなか、「歴史」そのものは必ずしも開放されたものではない⁷⁹⁾。それはライン川の向こうのドイツに対してのみ向けられたものではなく、ヴォージュ山脈の向こう側の「フランス内地」に対しても同様である。この点象徴的なのが、記念館開設の2005年、『セゾン・ダルザス』誌上におけるマルク・フェローの議論に対する地域からの反発である。フェローもまた、「全国的歴史家」の一人であるが、彼はアルザスを特権的な犠牲者と思なすことに警鐘を鳴らし、ナチ・ドイツの支配を受け入れるアルザス人の存在にも注意を払うべきである、と論じた⁸⁰⁾。これ自体、上述のラファエルのもと大筋で同じものといえるが、ラファエルが（ユダヤ系の）アルザス人である（と認知される）一方、フェローは「部外者」である（と認知される）だけに、地元世論における反発も一層強く、その後の「マルグレ・ヌ」をめぐる地域の議論のなかで、しばしば批判の対象となった⁸¹⁾。フェローの寄稿自体は、中本真生子も指摘するように、ポスト当事者世代における「記憶」から「歴史」へのスライドを表しているといえるが、その一方で依然としてせめぎあいは続いていることも事実である。

この点に関連するのが、記念館の名称であった。記念館建設の動きが表面化してから、この施設の名称は多くの記事において「記念館 Mémorial」と表されてきたが、一方でその当初には「歴史記念館 Historial」という表記も存在していた。この相違は単なる名称だけの問題ではない。というのも、前者はノルマンディーの平和記念館 Mémorial de la paix、後者はベロンヌの第一次世界大戦歴史記念館 Historial de la Grande Guerre を念頭においてのものであり、両施設のコンセプ

トとも密接に関連していた。すなわち、前者が展示による啓蒙と地元資料の掘り起しに重点を置いていたとすれば、後者はそれにとどまらず、国際的な学術センターとしての役割を担うものとされた⁸²⁾。ただし Mémorial が古くから使われている一方、Historial はペロンヌにおいて初めて使用された新語であった。1998 年 12 月 31 日付の「歴史記念館—計画と立地」と題する DNA の記事が、同年初に退役軍人庁長官マスレは「記念館」を使用していたが、一年後には「歴史記念館」という「奇妙な新語」が使われていると指摘するように⁸³⁾、ペロンヌの開館から 6 年しか経っておらず、この語が一般に定着したわけではなかった。とはいえ、同時にこの記事は、この時点においては、むしろペロンヌ的な方向性も模索されていたことを示唆するものでもあった。

ペロンヌ的な「歴史記念館」を推すのは、アルザス史の批判的な再考を要求するフレディ・ラファエルであった。2002 年の『ル・モンド』の記事において、彼が県議会議長リシェールの説得により学術委員会のメンバーとなることを承諾する前に、当初記念館建設に反対であったことに対して匿名の脅迫があったことを明かしつつ、建設されるのであれば、ペロンヌのように研究センターを擁した施設が建設されることを期待する、と述べている。それは、まさに上に述べたアルザス史の自閉的な「記憶」から文脈や比較を重視した「歴史」への移行への期待を示すものであった。一方、政治レベルでの旗振り役であったアラン・フェリーはそれに反対し、「ペロンヌはあまりに地味である」とし、「むしろ我々がモデルとすべきは、若年世代の見学者を惹きつけるカーンの記念館である」と述べている⁸⁴⁾。展示方法と研究センターの有無は本来別問題であるが、展示の演出に力を入れ、年間 30 万人を越える見学者数を誇るカーンの記念館の方が、国際比較研究が三国並列展示にも反映されているペロンヌの歴史記念館よりもモデルとして重視されたのである。実際、最終的には名称は「記念館」となり、その方向性も研究センターの役割は小さく、むしろ集客力のある展示演出に力を入れたカーンのそれに沿ったものとなったのである。

立地についてもまた、政治的な意向が反映されていた。記念館がシルメックに建設されることは決して最初から決まっていたわけではない。むしろ交通の便が決してよいわけではないシルメックでの建設には当初懸念も存在していた。建設候補地となっていたのはストラスブル(バラン県)、シルメック(同)、セルネー(オ・ラン県)、ファルスブル(モーゼル県)の4つの都市であった。しかし、イニシアチブを取り、財政負担の面でも中心的な役割を果たすのがバラン県議会であり、他方ロレーヌのモーゼル県はこの「アルザスのプロジェクト」に消極的であったこともあり、候補はバ・ラン県の2つの都市に絞られていった⁸⁵⁾。最終的には準備委員会が強く推していたストラスブルが辞退し、第二候補であったシルメックに決定した⁸⁶⁾。上述のとおり、シルメックには第二次世界大戦時にナチ支配に服従しない者たちの治安収容所があったという歴史的な象徴性もあったが、同時にロレーヌのすぐ近くであることから、「アルザス」による独占の印象を薄めることができるという計算もあった。さらにシルメック市長フレデリック・ビエリが「私たちにとって、50の雇用が生まれることは極めて大きなこと」と述べるように、伝統産業が衰退するブリュッシュ溪谷において、谷向こうのストルートホーフ強制収容所の改築と併せ、歴史観光 his-tourisme を地域の産業活性化の呼び水にする狙いがあった。記念館の設立を指揮・監督する合同理事会の会長に同

じ溪谷のウイシュの町長で、下院議員（UMP）でもあったアラン・フェリーが就任（のち記念館理事長）したことは、このことを裏付けている。フェリーは音響映像関係の会社の創設者でもあり、そのことは記念館の展示のあり方にも影響を与えることになる。

3. 2. 展示の構成と内容

では、実際のアルザス・モーゼル記念館の展示内容とその演出方法の特徴は、どのようなものであろうか。展示の概要については、2007年にマスメディア向けに配布された資料にそって述べていくことにしたい。この資料によれば、展示は以下の10個のテーマにそって構成されている。

1. 前史：ドイツによる併合から第二次世界大戦勃発まで（1870-1939）
2. 大戦勃発からフランス降伏まで（1939-1940.6.）
3. ゲルマン化（1940.6.-1940.12.）
4. 強制的同質化と強制召集（1942.8.）
5. 抵抗、同調者、抑圧
6. アルザル・ロレーヌの外における抵抗
7. 戦後
8. 過去の意味と将来への展望⁸⁷⁾

この構成からも明らかなように、期間としては最も長い、普仏戦争から第二次世界大戦勃発までの約70年間は前史であり、展示の中心はあくまで6年間の第二次世界大戦下のアルザス・ロレーヌ地方である。カーンの記念館、そして近年の多くの博物館と同様、アルザス・モーゼル記念館の場合も、入口・受付のコンコース空間と展示スペースが明確に分けられ、見学者はその境界を乗り越える「儀礼」を経ることになる⁸⁸⁾。アルザス・モーゼル記念館の場合、扉を開けた後、暗い階段を降りると、最初の展示である前史のコーナーがある。

天井高12mに及ぶこの長方形の空間に入場してすぐに目につくのは、数十枚の写真の肖像である。これらには周期的に光が当てられる一方、見学者の耳には、彼らが語っているかのように、フランス語、ドイツ語、地域語の囁きが流れている。上部空間（記念館ではこれを「イメージの大聖堂」と称している）におけるこの演出が当時この国境地域に生きた人々を個人として浮かび上がらせる一方で、光と声の頻繁な交代が非調和的な印象を与えている。他方、下部空間では三面がそれぞれ時系列に沿って（1）前史の前史としての30年戦争から普仏戦争、そして1914年までのドイツ時代、（2）第一次世界大戦時、（3）戦間期のアルザス・ロレーヌ地方の置かれた状況について、それぞれ資料と説明が展示されている。

第二の空間は開戦時のアルザス・ロレーヌ地方の様子が展示されている。ここでも、やはりカーンの記念館の影響を見て取ることができる。すなわち、当時の状況を空間的に再現し、そこに資料、とくに映像資料を埋め込むという方式である。最初のサブ空間には開戦時の大量疎開が駅と列車に



「ゲルマン化の廊下」 ©Mémorial d'Alsace-Moselle

よって再現されている。そしてそれを越えると今度はマジノ要塞の内部が再現された空間に入っていく。睨み合いの「奇妙な戦争」から「電撃戦」でフランス軍が敗北する様子は、映像によって確認することができる。

ナチス・ドイツによる「強制的併合」がテーマである第三の空間は、次の空間への通路となっている。そこでは青白赤のフランスから鍵十字のナチス・ドイツへの変化が色彩的に演出され、左側の壁には街路・広場の標識が多数並べられ、フランス語表記からドイツ語へ、そしてナチス関連の名称（「アドルフ・ヒトラー広場」、あるいは分離主義者で大战初期にフランスの軍事法廷で死刑判決を受け処刑されたカール・ロースの名を関した街路名など）へと変わっていく様子が表現されている⁸⁹⁾。他方右側の壁は、『フランスのがらくたを放り出せ』などのプロパガンダ・ポスターや、フランス語の使用やベレー帽の着用を禁じる政令などが貼り付けられており、地元住民が晒された「ゲルマン化政策」の圧力が表現されている。

すでにこの空間において聞こえている演説するヒトラーは、次の空間（4-5）になると大音量とともにその姿を現すことになる。このヒトラーの演説は、ヨーロッパ現代史をテーマとする博物館の多くで見学者が直面するものである。この空間では、ヴァーグナー（アルザス）、ビュルケル（モゼル）という二人の大区長の下でのナチス支配の「日常生活」が表現され、強制召集兵の徴兵検査会場、ゲシュタポの取調室、あるいはサロンなどが再現されている。また、ゲシュタポの建物内として設定された通路は次第に狭くなっており（遠近法の錯覚）、ナチ体制の抑圧を空間的に表現したものであるという。

圧迫感を感じる空間を越えると再び高い天井の空間に出るが、その冒頭に再現されているのは強制収容所である。柵とバラックの壁、電灯に囲まれた通路を通ると、右側にはアルザス・ロレーヌにおけるレジスタンスのネットワークについて、右側には対独協力者の諸グループにかんする資料が展示されている。

銃後から抑圧施設の空間を経て、見学者はヴォージュ山脈を模した山中へと入り込むことになる（7－8）。空中通路から暗い床面をのぞき込むと、そこには破壊された戦車や兵器が再現され、天井からは爆撃機の飛来音が流れている。この空中通路にはノルマンディー上陸作戦からフランス解放に至るまでの戦局、そしてアルザス・ロレーヌでの戦闘状況にかんする説明パネルが設置されている。映像資料には、これも多くの博物館で見られるゲッベルスのスポーツ宮殿での「総力戦」演説も含まれている。この空間が、記念館全体のなかで最も（キッチュな）演出が施されている部分である。

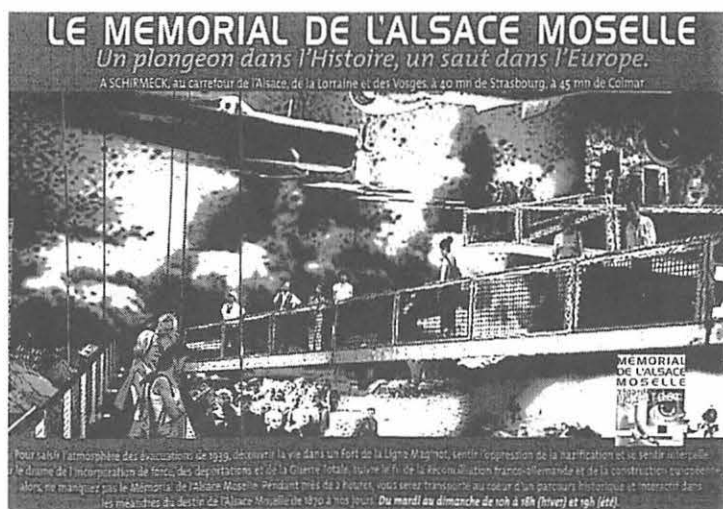
上り勾配である空中通路が終わると、やや明るい次の空間に至る（9）。勾配と光量は言うまでもなく、戦争の推移を表現したものであるが、その一方で廃墟の家屋とそこに展示されたパージ、タンボフでの捕虜、復員帰還を待ち侘びる家族に関する資料などが展示され、戦争終結後もなお続く苦難が表示されている。この空間の突当りには、ギリシャ風の柱によって表現された法廷があり、そこから奥底をのぞき込むと、まず無数の引き出しが目につき、さらに下を除くと、オラドゥール裁判に関する映像が流れているのを確認することができる。

ようやく次の空間において（10）、光は「普通の」量となり、そこでは戦後における独仏和解に関する資料がガラスケースに展示されているが、これまでのような説明の文章は付記されていない。最後に隣のスペースにおいて20分弱の映像を視聴することになるが、そこでは、若いドイツ人男性とフランス人女性がそれぞれベルリンとパリを発ち、ヨーロッパ議会のあるストラスブールにおいて邂逅する道程が戦後における独仏和解の過程と重ね合わせた形で描写され、その合間において、三面スクリーンにはその間起こった様々な出来事—ハンガリー動乱、プラハの春、ベルリンの壁崩壊など—のスナップショットが挿入され、またかつての強制収容所の抑留者、レジスタンス、そしてシルメックの小学校の子供たちが記憶の継承を表現すべく映し出され、最後はベートーヴェンの第九とともに幕を閉じ、そして見学者は入場と同様、扉を開けて、再びコンコースに戻ることになる。

3.3. 空間の再現的演出—「記憶のディズニーランド」？

各空間の説明においても述べたように、アルザス・モーゼル記念館において特徴的なのは、再現的演出の多様であり、第一展示空間以降、ほぼすべてのスペースにおいて「歴史的場面」が再現され、ヒトラーの演説や爆撃などの音声、明暗の演出が施された空間を見学者はまさに「タイムマシン」のごとく通過していくことになる。フランスの大戦博物館における演出について分析したドミニク・トルーシュは、カーンの平和記念館やヴェルコール・レジスタンス記念館などにおいても、再現手法の活用は顕著であるが、その1つの到達した形態がアルザス・モーゼル記念館であると指摘している⁹⁰⁾。

このような視聴覚的演出も含めた再現手法は、しばしば「歴史のディズニーランド化」、「歴史のテーマパーク化」という批判を引き起こすことにもなった。実際、開館時の記念館の広告に、博物館というよりは（ジェットコースターやお化け屋敷を備えた）テーマパークを連想させるものであった。2004年のDNAの記事において、記念館の建設実行責任者であったジャン＝ピエール・ヴ



記念館の広告 *Les Saisons d'Alsace* 27(2005), p.34.

エルディエールは、「シルメックのプロジェクトが歴史のディズニーランドではないかという声も聞かれるが」という問いかけに対し、以下のように反論している。「私はそれで何を言おうとしているのか、よくわからない。私分かっていることは、建築家フランソワ・セイヌールとシルヴィー・ドゥ・ラ・デュールたちが、見学者を私たちの手法の中心に置き、見学者を巻き込むよう定められた仕様書にきちんと応えることができた、ということである。重要なのは、何を見させるかということだけではなく、見学者の感情をイメージと音で喚起し、そこからメロドラマに陥ることなく、インターアクティブな場を作り出すということでもあったのだ」⁹¹⁾。また、演出を手掛けたマルセル・メイエルもシルメックの市民集会において、記念館の展示理念は伝統的な整理された資料展示でも、内容よりもスペクタクルが優位の「ディズニーランド・プロジェクト」でも、あるいは先進技術のガラスケース展示でもないとし、「人間の現実感性に語りかけられなければならない、重要なのは雰囲気を作ることと資料の紹介をどのように両立させるかである」と指摘している⁹²⁾。

「歴史のディズニーランド化」とは、文化ナショナリズムの強いフランスにおいてはとりわけ否定的に用いられる批判文句であり、たとえばパトリック・ブラドーは1995年の論文において「民俗学博物館」の「ディズニーランド化」を語っている⁹³⁾。「ディズニーランド化」であれ、「テーマパーク化」であれ、その前提となるのは、内省的に歴史を考察する場であるべき博物館が、過剰な演出によってアトラクション（見世物＝スペクタクル）化し、展示される過去が学習ではなく余暇として消費されることへの懸念である。実際、こうした再現型の歴史博物館は演出された語りを単線的に追体験する規定力が強く働いており、それは作品と向き合い沈思黙考するスペースが中央に設けられ、順路に逆行することも織り込まれている美術館とは鋭い対照をなしている⁹⁴⁾。このことは、第一次世界大戦の博物館の展示にかんするドイツの歴史家ゲルト・クルマイヒの議論とも通底している。彼は、ペロンスの博物館が当初塹壕を再現し、そこを見学者が通過するような仕掛けを考案したが、結局は断念したことに触れ、安易な感覚的な「追体験型」展示が歴史的な文脈抜きに

「分かった気にさせる」危険性を指摘している⁹⁵⁾。

上述の通り、アルザス・モーゼル記念館関係者の側もこうした批判は意識しており、自らの展示の趣旨を「感情」と「知識」の組み合わせである、と強調している。ただし、これまで知識・文字情報偏重であったという認識が前提にある以上、それは「感情」への傾斜を意味することになる。たとえば展示スペース4-5の取調室、書斎において、見学者はそこで椅子やソファーに自由に座ることができる。そこで期待されているのは一後者の場合、ナチ幹部の書斎の書棚を独占するナチ思想関係の書籍によって象徴される—ナチ体制下の抑圧的日常生活を「感じる」ことであろうと推測されるが、このスペース自体には説明資料の量は抑えられたものとなっており（多くあればかえって「感じる」ことを阻害することにもなろう）、見学者がどの立場に自らを置き、何を感じるのか、何に違和感を持つかは必ずしも明確ではない⁹⁶⁾。

「体験」重視の再現展示のもつ可能性と問題点はまさにこの点にあるといえる。繰り返しになるが、それは一方で、文字情報による乾いた、揮発性の高い知識に対し、感覚・感情に訴えることによって、より強いインパクトを見学者に与えることを意図している。他方でそれは、見学者自身の感覚によって認識自体が展示側の意図しないものとなる可能性を持つものでもある。この可能性は、オープンエンドな多様な解釈を許容するものでもあり、逆説的に展示が提示しようとするナラティブへの批判的な視点ともなりうるが、情報による補足がなければそれ自体も揮発的なものとなってしまふであろう。「感情」と「情報」のバランス、展示と見学者のインタラクティブな関係、こうした関係者が強調する点そのものは、21世紀の歴史博物館の新たな可能性として重要であることは間違いないが、問題はそれをどのように構築していくか（「感情」と「情報」のバランスのみならず、その連携のあり方）という点であろう。アルザス・モーゼル記念館は、まさにその実験的な施設として可能性と問題点の双方を示しているだけに、興味深い事例である。

さらに「体験」型展示の背景として確認しておくべきことは、ターゲットとなる見学者層がまさに戦争「未体験」世代であり、この点において演出担当者と政治の側が一致していることである。もちろん、体験者、とりわけ旧「マルグレ・ヌ」たちも多く記念館を訪れており、徴兵検査の再現場面ではまさに自らの体験を想起して、感極まる者も少なくないという⁹⁷⁾。とはいえ、2005年開館の同施設の主要なターゲットとなるのはむしろ若年層であることは自明の理であり、彼らにとって第2次世界大戦の歴史は、家庭の場においても直接体験者の記憶が伝承される可能性はますます低くなってきている。そうしたなかで、若年層にとって魅力的な展示の必要性が重視され、またマスメディア、インターネット時代を生きる彼らが「耳目の肥えた」世代であるだけに、さまざまな演出方法が模索されている。このことは、たんに副次的な形式の問題ではなく、歴史の社会性を問う公共史の観点からみれば本質的な問題といえるだろう⁹⁸⁾。

一方、展示内容を規定した学術委員会は展示の「劇場化」に対して当初消極的であり、上述のラファエルの発言にもあるように、むしろベロンヌ流の「戦争の日常性を伝える遺物の展示」を望んでいたという⁹⁹⁾。しかし2005年の開館時には、委員会メンバーで「マルグレ・ヌ」の専門家である歴史家ウージェーヌ・リードウェグは、展示にきわめて満足していると述べ、「演出における見

世物的な側面は私にとって阻害的なものではない。それは記念館を、若者をはじめとするあらゆる人々にアクセス可能とする。各見学者はそれぞれのやり方で見学すればよい。全体の概観を得ることも、また細部に立ち入ることでも満足することができる」と指摘している¹⁰⁰⁾。一方、学術委員会委員長であったワールは2009年のエッセイにおいて、「記念館は沈思黙考の場ではなく、カーンの記念館流の劇場化によって特徴づけられる教育的な場にすぎない」と批判的とも取れる言及を行っている¹⁰¹⁾。結局のところ、「記念館は第2のエコミューゼではない。それは様々な目的を総合しなければならない—すなわち、ヴォージュ溪谷地方の地域振興計画、程度の違った形ではあれ劇的な時代を生きた地域住民たちの記憶の場、学校生徒たちの教育的道具、そして娯楽と文化的余暇の施設として」という統括責任者ヴェルディエールの言が、いみじくもアルザス・モーゼル記念館もその一つである近年の公共史としての記念館の役割を言い表しており¹⁰²⁾、ここに歴史博物館であっても歴史家の果たす役割、あるいは発言権は限定的であることが改めて確認される。

4. 開館以降の記念館に対する反響

4.1. 政治と社会における認知

2005年6月18日、予定より1年余り遅れ、アルザス・モーゼル博物館は、リシェールやアルザス地域圏議会議長(当時)アドリアン・ゼレール、また退役軍人庁長官アムラウイ・メカチュラの代理として産業相でストラスブール出身のフランソワ・ロースら国家・地域の関係者が参加するなか開館した。その祝辞においてロースは、「1870年、1914年そして1940年の戦争、そして分離の悲劇に加え、〔戦後においても〕無理解のトラウマが存在した。この記念館は今世紀(ママ)の最も残虐な側面と最も困難な時期を取り上げるものであり、その歴史はさらに書かれなければならない」と述べている¹⁰³⁾。開館を待ちかね、大挙して訪れた地元見学者たちの「感情を揺さぶられた」との声も新聞に掲載された¹⁰⁴⁾。

この開館式典の招待客のなかにはオラドゥール町長フリュジエールの姿もあった。そこで彼は、「素晴らしい記念館だ。私は私たちが体験した悲劇の正当かつ客観的な事実関係〔の描写〕によって気分を害するリムーザン人がいるとは思わない。私たちは、これからもアルザスとリムーザンの和解を追求する(…)たとえこの和解の誠実さを疑う者がいようとも。私たちは未来の世代に責任がある」と述べている¹⁰⁵⁾。記念館という地域の記憶の場が設立されることによって、地域間の交流が推進されることになり、友の会の活動によって、教育、学術的に他地域との連携が進められていることも事実である¹⁰⁶⁾。しかしまた、この発言が示唆するように、その後も地域間の歴史認識の差異はさらにくすぶり続けたことも事実である。その最も象徴的な例が、オラドゥール事件の生存者ロベール・エブラスの証言記録の再版(2009年)における「自称マルグレ・ヌ」の記述をめぐる訴訟問題であった¹⁰⁷⁾。2012年9月、エブラスがコルマル控訴院で象徴的な1ユーロの罰金刑が言い渡されたその1週間後に(最終的には2013年10月に破棄院において無罪判決)、ドイツ連邦共和国功労章が授与されたという皮肉な事実は、第2章において述べた、独仏和解と地域間和解の齟齬が今なお存在することを如実に示すものであった¹⁰⁸⁾。

オラドゥールの平和記念館の開設式典には大統領シラクが参列していたのに対し、アルザス・モーゼル記念館のそれには参列しなかった。彼が初めて訪問したのは約5か月後の2005年11月初め、谷向こうのストルートホーフの強制収容所記念施設の記念式典に合わせてのことであり、短時間の訪問で、退役軍人団体など関係者の招待もされない形で行われた。このことは、「マルグレ・ヌ」、ひいてはアルザスがフランスにおいてなお「二級の犠牲者」と見なされているのではないかと、という疑いを改めて惹起することになった¹⁰⁹⁾。これに対し、シラクの後任者となったニコラ・サルコジは2007年の大統領就任前から当選した暁には記念館を訪れたいと述べ、より「親アルザス」的な対応への期待が高まった¹¹⁰⁾。結局、この「公約」は果たされないままとなったが、2010年5月8日の終戦65周年の式典の場所をオ・ラン県コルマルに選んだサルコジは、そこにおいてフランスの名誉を汚したのはヴィシー政権であり、「マルグレ・ヌ」は「真の戦争犯罪の犠牲者」であると演説している。政治的にみれば、同年3月の野党社会党が圧勝した地域圏議会選挙において唯一彼の政党UMPが過半数を確保したアルザスへの謝意とも取れるが、それは記念館訪問を実現できなかったことに対する「謝意」でもあり、地域世論はこれを「犠牲者共同体」としてのフランス国民国家における認知と受け止めたのである¹¹¹⁾。

ただし、上述の通り、地域世論が必ずしも一枚岩ではなかったことを考えると、記念館の展示が全面的に支持されたわけではないことも不思議ではない。展示に対する具体的な批判の代表例が、「ジャック・ペロート・クラブ」である。第1次世界大戦後ストラスブール市長となる社会主義者の名を冠したこの左派系の協会は、2006年記念館館長に「違和感の記念館 Le memorial du malaise」と題する覚書を送っている。そこでは演出が過剰なまでに感情に訴え、知覚が蔑ろにされているとし、フランス内地の人間は驚くだけで理解せず、アルザスの人間は犠牲者のポジションを固守し、そして前章における批判と同様、学校の児童たちは記念館を「ほとんど歴史のディズニーランド」と見なすであろうと述べられている。さらに、再現された場面の時代考証的な問題—例えばナチの施設がヴィルヘルム期の建築様式によって再現されている—から、ナチ支配において当初はドイツ化政策で住民を手なづけ、そこからナチ化への急進化していく過程が看過され、そもそも普仏戦争後のドイツ時代と第二次世界大戦期のドイツ時代をともにネガティブな形で等置する印象を与えるになる、という歴史認識上の問題点が指摘されている。

そのうえで、同クラブは改善点として、以下の5点を提起している。(1)映像資料を精選し、ザッピングをやめ、見学者自身が操作できるようにすること、(2)音量を下げ、説明や見学者間の意見交換ができるようにすること、(3)より現実的な演出—たとえば疎開列車を家畜用貨車を含めた実際に近いものに置き換えること、(4)レジスタンス、シルメック治安収容所についての説明パネルの改善し、詳細にすること、(5)戦後を平和な独仏と以前戦争と暴力に見舞われるその他の世界という陳腐な二項対立で描く、最後の空間の短編映像を廃止すること¹¹²⁾。

この書簡の影響として、(2)と(4)については実際に要望に沿った形で改善が施された。その他の点については、すぐに対応できる性質のものではないこともあり、変更は行われていない。(4)については、前章で述べたように、通路の左側の壁に対ナチ協力者、右側にレジスタンスの説明パネ

ルが据えられていたが、その展示のバランスがあまりに対ナチ協力者側に偏っており、クラブ側は「半ば極右 *extremistes* にとどまることを良しとするのか」と述べ、積極的に抵抗したグループに対しそれに相応しい説明の量を与えることを要求したのである。レジスタンスの説明の充実そのものは重要な改善であるのは確かである。しかしここで留意すべきは、前述のラファエルの発言にもあったように、対独協力の様々な形自体もまた重要なポイントである以上、その説明にもスペースが必要であるということである。展示の説明は、ナチ労働戦線の秘密世論調査の結果が引用され、積極的にナチス支配を受け入れる者は住民の10%以下であり、彼らの支持の理由は親独的心情、ナチ・イデオロギーの誘惑、出世主義など多様であったことが指摘されている¹¹³⁾。しかし、こうした多様性の展示、演出自体が十分か、効果的であるかはまた別問題である。アルザス・モーゼル記念館に限らず、戦争博物館の多くは、加害者（積極的加担者）と抵抗者・犠牲者に二極化した形で展示が行われ、その間に存在した同調者、日和見主義者たちが積極的に取り上げられることは少ない。それは二分法の分かりやすさ、そしてアクチュアルな意味においてモデル、同一化の対象とすべきは抵抗者・犠牲者という発想からすれば、不思議ではないかもしれない。しかし、まさにその間を揺れ動く同調、日和見そのものがアクチュアルな問題であると考えれば、これらのグループもまた、展示においてより重視されるべきではないだろうか。

4.2. 見学者の感想から

ところで、ペロート・クラブが指摘し、改善された音量の問題は、見学者たちが見学後に記す感想ノート *livre d'or* においてもしばしば表明されていた点であった。そこには他にも、オーディオ・ガイドの機能不全、記念館の標識が不十分で見つけにくい、駐車場から入口までの距離（麓から丘までジグザクの坂道を登っていく—それ自体独仏間を揺れ動いたアルザス・ロレーヌ地方の歴史を象徴するものであったが）が、とくに高齢の見学者にとって苦痛であることや、説明パネルの位置と文字の小ささなどが、施設・技術的な面での問題点として指摘されている。

この感想ノートも見学者の「生の声」として、資料的な価値は十分にあるといえよう。ただし、この種の資料の特徴として、その多くが展示者側の意図を汲んだ、短い肯定的な感想が大半を占めるという点が挙げられる。実際、アルザス・モーゼル博物館の場合も、「感動的 *émouvant*」, 「印象的 *impressionnant*」, 「素晴らしい *superbe, génial*」といった文句が多く並び、またそれはフランス人のみに限られたものではない。ドイツ連邦軍予備兵である見学者は、「犯された不正についてのフェアな、しかし恐るべき回顧に感謝。10年間の独仏の予備兵の協力は、教訓が学ばれ、未来はともにあることを示している」と自らの体験に引きつけて述べ¹¹⁴⁾、またあるパレスチナ人の見学者も、「この場所はわたしに別の期待を与えてくれる。なぜなら私たちは人生において何事も忘れることができるが、苦しみだけは人生の最後まで残るからである。私はこのような場所が私の国にもできることを望む」と、やはり自国の状況に照らしてモデルを記念館に求めている¹¹⁵⁾。世代的には好意的反響は若年層に多くみられ、ペロート・クラブによる批判の一方で、若者にインパクトを与えるという記念館側の趣旨は一定の成果を挙げているとも受け取れる¹¹⁶⁾。一方、これは十

分に想定されることであるが、長文の感想を寄せているのは、体験者とその家族によるものが多い。ここでは、時間的制約もあり、感想ノートを網羅的に分析、考察することは不可能であるが、とくに内容・展示のあり方に批判的な感想をいくつか取り上げることにしたい。

上述の通り、感想ノートには音量に対する苦情が散見される。この点、ある女性は、「とても良い演出でした。いや、成功しすぎたかもしれません。戦争の暴力〔の展示・演出〕は私には耐えがたいものでした。1940年生まれの私には、孫たちに見学することを勧めるのは不可能です。見学するにはこの映像・画像と効果音に向き合うためには成人となり、準備をしておく必要があります」と、むしろ演出がかえって若年層には有害ではないか、との疑念を呈している¹¹⁷⁾。同様に、最後の空間における映画における暴力的場面の頻出を過剰であり、不要であるとする感想もある。

内容、構成については、開館1か月後に見学した歴史家を名乗る女性が、1870～1939年に全体の4分の1のスペースしか割かれていないことに触れ、「第二次世界大戦は確かに重要だが、しかし150年の歴史のなかで6年間の一コマに過ぎない」と述べ、さらに「歴史のアトラクション化」の危険性を指摘している¹¹⁸⁾。他方、量的には、自らの関心のある出来事が展示に反映されていないことに対する不満の表明が多くを占めている。たとえばアルザスのレジスタンスについての記述が不十分である¹¹⁹⁾、「再教育」のためにズデーテンやシュレジエンに強制移住させられたアルザス・ロレーヌ地方の家族について言及がない¹²⁰⁾、アルザスの歴史を最も象徴的に体現しているアルベルト・シュヴァイツァーが無視されている¹²¹⁾、などの他、「セネガル、北アフリカ、サハラ以南アフリカの植民地部隊の兵士たちはこの展示のどこに描かれているのか。見学者として、その不在に私は驚かざるを得ない。植民地部隊の兵士たちは、アルザスの解放に身も心もささげたというのに」という、アフリカ（植民地）とアルザスの関係性を問う、興味深い指摘も見られる¹²²⁾。

4.3. 「独仏和解・ヨーロッパ統合記念館」と「名前の壁」

2005年の開館から現在（2012年）に至るまで、記念館の常設展示には大きな変化はないが、今後大規模な増改築が予定されている。その柱となるのは、見学者の感想にもあった戦後の独仏和解の展示の充実である。2011年、「EU-PHORIA」と銘打たれたこの拡張計画において、1000平米のスペースに、従来の展示ではすでにエンドロールのような印象を与えていた戦後独仏和解、ヨーロッパ統合が主題化されることとされた。地域圏議会議長となったリシュールは、「1870年以降のアルザス・モーゼルの戦争の歴史が語られたのち、記念館は（…）ヨーロッパに目を向けなければならない」と、拡張の必要性を訴えている¹²³⁾。この名称（EUの幸福感）自体、ユーロ危機が本格化した状況においては皮肉なものではあったが、一方で記念館の見学者数が開設当時の8万人の見込みが、実際には4万5千人程度と60%弱にとどまっており、記念館、そしてその財政主体であるアルザス地域圏議会、そしてバ・ラン県にとって、テコ入れの必要性が強く感じられたことも背景にあった。

展示内容の三本柱として挙げられているのが、ローマから共同通貨ユーロに至るまでの共通の文化の発展、国家の多様性を排除しない連合、ヨーロッパ人誕生の未来、ということからも分かるよ

うに、拡張展示は「ヨーロッパ」の過去、現在、未来を回顧し、展望するものが企画されているが、重点は戦後に置かれている。この点、2007年にローマ条約50周年を記念して開設されたブリュッセルの「ヨーロッパ博物館」を強く意識したものとなっており¹²⁴⁾、ストラスブールにヨーロッパ議会を擁するアルザスにおいても、ヨーロッパの記憶の場を作り、これまでの地域史展示をそこに結び付けていこうとする意図が伺え、「アルザス・モーゼル記念館」という名称そのものの変更すら検討されているという。

2013年夏の時点では、仕様をめぐる調査が行われている段階であり、その内容は判然としていない。具体的にどのような形で地域とヨーロッパの歴史が接合されていくのか、あるいは並列的な展示となるのか、「ユーフォリア」という名称からは、ハッピーエンドな結末としてのヨーロッパ統合が連想されるが、ヨーロッパ統合の様々な試練—移民問題や通貨問題—などについての展示はあるのか、今後その推移に注目していく必要がある。他方、記念館理事長フェリーは、「若者にヨーロッパへの関心を喚起するためには記念館の〔地域史展示〕以上に大胆な演出が必要である」と述べ、ハリウッドのユニヴァーサル・スタジオにおける「戦場に架ける橋」に倣ってベルリンの壁を再現し、それが定期的に崩壊する仕掛けを提案している。文字通り「歴史のテーマパーク化」の実践ともいえるが、フェリーは意に介することなく、「スペクタクル、映像、音声を提案しなければならない」と、むしろ「テーマパーク化」にこそ記念館の可能性を見ている。この彼の提言がどの程度受け入れられるのか、それによって「再現演出」の手法がさらにどれだけ展開されるのかもまた、看過できない点である。

しかし、こうしたヨーロッパ志向は、記念館の地域色を薄めることになるかということ、そうではない。2010年には記念館の麓の参道そばにタンボフの捕虜収容施設が再現されている。そして地域世論において議論を喚起したのは、犠牲者の一人一人の名前を刻んだ慰霊のための「名前の壁」であった。この記憶の手法は、ワシントンのホロコースト・メモリアルやパリのショア記念館などにおいてすでに実践されていたが、これをナチ期のアルザス・ロレーヌ地方にも適用しようとするのが趣旨であった。この要望は2006年、「アルザス・モーゼル・マルグレ・ヌ孤児協会 OPMNAM」によって表明されたものであった。この協会は記念館が開設された2005年に結成され、マルグレ・ヌの犠牲者史観においてもっとも急進的といえる立場を取っている¹²⁵⁾。それはすなわち、アルザス・ロレーヌ地方の強制的併合と国際法に反した徴兵を「ジェノサイド」と位置づけ、その直接の加害者であるドイツと、対独協力によってそれを幫助したフランスの2つの国家に対し歴史的責任と、犠牲者としての正式な認知を要求するものであった。特筆すべきは、独仏両国政府に対する書簡の送付に加え、ストラスブールのヨーロッパ人権裁判所においてドイツ政府を相手取り、偏見によって孤児たちが蒙った倫理的、心理的、経済的損害に対する賠償要求を行い（棄却）、またパリにおける独仏首脳会談時にデモを行うなど、その積極的な活動である¹²⁶⁾。

アルザス・モーゼル記念館の参道に設置されるべき、マルグレ・ヌのみならず、その遺族、そして帝国労働奉仕 RAD や戦時奉仕労働 KHD に動員された女性（「マルグレ・エル」）など、ナチ支配の犠牲者が対象とされた「名前の壁」は、彼らにとっては象徴的な名誉回復を意味し、記念館の

マルグレ・ヌたちの慰霊的施設としての性格をより強化しようとするものであった。この「名前の壁」の設置に対し、「政治的道具化」との批判や¹²⁷⁾、2008年の経済危機直後の状況で、このような計画に公金を投入する必要性があるのか、との声も聞かれた¹²⁸⁾。また、設置賛成派の間でも、どのような壁を設けるかについては、主唱者である「孤児協会」とアルザス・モーゼル記念館理事長フェリーの間に意見の相違がみられた。前者は実体として名前が刻まれる壁を主張したのに対し、後者は電光掲示板による表示が行われているバリのケ・ブランリーのアルジェリア戦争の犠牲者追悼記念碑（2002年設立）をモデルとした、「ヴァーチャルな壁」を推奨した。その際フェリーは、「調査の進展により随時追加訂正することができる」という実践的な利点と、それをむしろデータバンクとして活用することで、記念館は歴史博物館としての教育的な役割が果たせると強調している。これに対し、協会側はそのような壁は「恥の壁」であると強く反発し、あくまでも実体としての壁の設置に固執した。

最終的には、地域圏議会議長リシュールの裁定により、2つの壁を共に設置することとし、実体の壁については直接名前を刻むのではなく、交換可能な半透明のプレートに名前が記されたものを壁に接着させることとなった¹²⁹⁾。いずれにしても、ヨーロッパ志向と地域の犠牲者アイデンティティの強化という2つのベクトルが、現在のアルザス・モーゼル記念館において作用していることが確認できる。そして孤児協会の観点からすれば、独仏和解は完了した事実として展示されるものではなく、むしろこれまでそれが国境地域の頭越しに行われてきたことに対して異議申し立てをすべきものということになるであろう。このこともまた、今後独仏和解とヨーロッパ統合の展示のナラティブ、そしてその地域史との関連付けに注目させる点である。

おわりに—国境地域の歴史認識：「シェンゲンの状況」？

国境地域の記憶の場としてのアルザス・モーゼル記念館は、以上見てきたように、ヨーロッパ統合という観点からだけではとらえきれない、複雑なメカニズムによって形成されている。その原動力となったのは、国境地域ゆえの「苦難の歴史」の認知要求であり、それは何よりも「フランス内地」に対して向けられたものであった。このことは、日本でも紹介されているウージェーヌ・フィリップスやアンドレ・ヴェックマンのように、独仏国境地域ゆえの「二重文化」的アイデンティティを主張し、国民国家そのものを乗り越えようとする議論とはおのずから次元を異にするものであった¹³⁰⁾。実際、記念館の展示において、アルザス・ロレーヌ地方におけるドイツ文化の役割を強調するような内容は、第1ホールの囁きのなかの声を除けば、皆無といってよい。それはあくまでもフランス側の国境地域でなければならないのである。1945年までの苦難の歴史は国民国家という戦争の主体があってはじめて説明されると同時に、現在においても認知要求は何よりも「無理解な」国民国家の中心に対して向けられている。

しかし、その国民国家における認知の要求は、ヨーロッパという国民国家を越えた枠組みとその理念によって正当化されるものでもあった。この言説の連関は、ヨーロッパ統合の実体的なプレゼンスが存在するアルザスの場合、困難なものではない。ただし、そのような「普遍的な」価値に立

脚することは、一方的な自己主張だけでは不可能であることも事実である。国内的には、オラドゥールとの対話が問題を孕みながらも継続して行われており、また対外的には、記念館が特別展示やシンポジウムによって、ポーランドやルクセンブルクなど、他のヨーロッパ地域における「マルグレ・ヌ」と連携し、それをヨーロッパの記憶のなかに位置づける試みがなされている¹³¹⁾。

ただしこうした地域・国民国家・ヨーロッパの三層構造の間の「記憶の補完性原則」は決して安定したものではなく、緊張関係が存在することは、前章でも述べた通りである。この点興味深いのは、類似の歴史的背景を持つドイツ・ポーランド国境地域、オーバーシュレジェンの事例である。ここでも近年、地域史の新たな展示（カトヴィツェ・シュレジェン博物館）が計画されている。しかし、当初計画されていたドイツ、ポーランドのいわば「二重文化」的なオーバーシュレジェン史を展示する試みは、そこに自治主義の文化的プロパガンダを見る政治勢力やカトリック教会の強い反発を受け、挫折を余儀なくされた。ここにもまた、少なくとも現時点における国民国家の強い抵抗力が示されている。それとともに注目されるのは、この計画においても、その展示方法には再現的な演出の多用が構想されていたことである¹³²⁾。アルザス・モーゼル記念館の場合、エコミュゼからカーン平和記念館へと至る演出論の展開が前提にあり、また世界的にもこうした潮流が存在するなか、国境地域と再現演出の親和性を過大評価するべきではないが、認知要求の強さがその背景として考えられる可能性はある。これについては今後の課題としたい。

このような記憶をめぐる状況は、記憶文化における「シェンゲン協定的状況」といえよう。すなわち、交流、連携などが一方で進められているが、同時に国民国家の境界は厳然として存続している。アルザスの地理学者であるジュラル・トラバントもまた、その著『国境を消す』（2007年）において、社会的、経済的、文化的な交流がライン川兩岸において推進されている一方で、若者たちの意識ではむしろ差異がより認識され、そこでは「アルザス人」としてよりも「フランス人」という意識が強まっているという世論調査の逆説をふまえ、「国境はますます越えられていく。しかしそれは消去されない」と結論している¹³³⁾。まさにこの意味において、アルザス・モーゼル博物館はヨーロッパ国境地域の象徴的な記憶の場と言えるかもしれない。

注

- 1) 本研究にあたっては、アルザス・モーゼル記念館館長バルバラ・エッス、同記念館特別展示担当マリオン・クリストマン、同記念館友の会会長マルセル・スピセル、さらに歴史家ジャン＝ピエール・イルシュ、同レオン・ストロース、ジャック・ペロート・クラブ会長ジャンネット・ブーレーの諸氏にご協力いただいた。記して謝意を表する。
- 2) 日本語で一般に用いられる歴史的地理概念である「アルザス・ロレーヌ」における「ロレーヌ」は、ロレーヌ地方のうちドイツによる二度の併合を経験したのが北東部（モーゼル県）だけであることもあり、今日のフランスでは使用されることはほとんどない。今日では、むしろこの博物館の名称のように、「アルザス・モーゼル」と呼ばれるのが一般的である。ただし本論では、日本における定着の観点から「アルザス・ロレーヌ」を使用することとし、「アルザス・モーゼル」は記念館の名称と、直接引用の際における表記としてのみ使用することとする。François Roth, *Alsace-Lorraine, l'histoire d'un "pays perdu". De 1870 à nos jours*, Nancy : Éditions Place Stanislas 2010.

- 3) Sophie Wahnich, "L'Europe, c'est toujours l'après-guerre...", in: *ibid.*(ed.), *Fictions d'Europe. La guerre au musée. Allemagne, France, Grande-Bretagne*, Paris : éditions des archives contemporaines 2002, pp.17-38, 28.
- 4) Marie-Hélène Joly, "L'Etat et les musées de guerre en France: indifférence ou impuissance?", in : *Tumultes* 16(2001), pp.163-183, 163.
- 5) この点については以下を参照。拙稿「二国間教科書の可能性と限界—独仏共通歴史教科書の事例から」『歴史学研究』899(2012), 52-59 頁, Akiyoshi Nishiyama, "Ein Ziel in weiter Ferne? Das gemeinsame deutsch-französische Geschichtsbuch aus japanischer Sicht", in : *Revue d'Allemagne et des pays de langue allemande*, 41(2009), pp.103-121.
- 6) 付け加えれば、とくにドイツの場合、第一次世界大戦の記憶の舞台がもっぱら塹壕戦の西部戦線であるのに対し、第二次世界大戦のそれはホロコーストの主要舞台となった東ヨーロッパであるという相違も挙げられる。これらの点については以下を参照。Thomas Thiemeyer, *Fortsetzung des Krieges mit anderen Mitteln. Die beiden Weltkriege im Museum*, Paderborn: Schöningh 2010, pp.322-325; *ibid.*, "Zwischen Helden, Tätern und Opfern. Welchen Sinn deutsche, französische und englische Museen heute in den beiden Weltkriegen sehen", in: *Geschichte und Gesellschaft* 36(2010), pp.462-491, 489-491. 西ヨーロッパ諸国における第二次世界大戦の記憶の変容を概観したシュテファン・ベルガーも、英雄史観と苦難の連帯の記憶という点で一貫しているのがイギリスとルクセンブルクであると指摘している。Stefan Berger, "Remembering the Second World War in Western Europe, 1945-2005", in: Małgorzata Pakier, Bo Stråth (eds.), *A European Memory? Contested Histories and Politics of Remembrance*, New York: Berghahn 2010, pp.119-136, 130.
- 7) 石田勇治『過去の克服—ヒトラー後のドイツ』白水社, 2002 年。
- 8) 渡辺和行『ホロコーストのフランス—歴史と記憶』人文書院, 1998 年。
- 9) フレデリック・オッフエ (宇京頼三訳)『アルザス文化論』みすず書房, 1986 年。
- 10) 中本真生子『アルザスと国民国家』晃洋書房, 2008 年。
- 11) 複数の国境地域の事例研究を集めた論文集として、以下を参照。Bernard Ludwig, Andreas Linsenmann (eds.), *Frontières et réconciliation. L'Allemagne et ses voisins depuis 1945*, Bruxelles : Peter Lang 2011; Patrick Ostermann, Claudia Müller, Karl-Siegbert Rehberg (eds.), *Der Grenzraum als Erinnerungsort. Über den Wandel zu einer postnationalen Erinnerungskultur in Europa*, Bielefeld: transcript 2012.
- 12) 本論文の準備と並行して、共立女子大学国際学部は 2011 年 2 月末～3 月初にかけて、筆者引率の下、ポーランド、ドイツ、フランスを横断する海外研修旅行を実施し、アルザス・モーゼル歴史記念館とともに、ナイセ河畔の国境都市ゲルリッツ (ドイツ側) のシュレジエン博物館を訪問・見学した (アルザス・モーゼル記念館の訪問については、同記念館友の会の定期刊行誌 Cf. *Le Courrier du Mémorial*, 21(2013), p.5 において紹介されている)。本来は本論文においてこの 2 つの国境地域の歴史博物館を比較考察する予定であったが、時間と紙幅の関係からシュレジエン博物館については別稿を期することにした。他にも、メッス近郊グラウヴロット (普仏戦争の主戦場の 1 つ) のモーゼル歴史博物館 (2014 年春開館予定)、シュレスヴィヒ・ホルシュタインにかんするインターネット上のバーチャル歴史博物館、さらにグライフスヴァルトのボンメルン州博物館などを今後考察対象にする予定である。
- 13) 近藤孝弘『国際教科書対話—ヨーロッパにおける「過去」の再編』中公新書, 1998 年。
- 14) 最近の研究の代表例として、以下参照。Barbara Korte, Sylbia Paletschek (eds.), *History Goes Pop. Zur Repräsentation von Geschichte in populären Medien und Genres*, Bielefeld: transcript 2009; Susanne Popp et al. (eds.), *Zeitgeschichte – Medien – Historische Bildung*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht

- 2010; Barbara Korte et al. (eds.), *Popular History now and then : international perspective*, Bielefeld : transcript 2012 ; Pascal Blanchard, Isabelle Veyrat-Masson (eds.), *Les guerres de mémoires. La France et son histoire. Enjeux politiques, controverses historiques, stratégies médiatiques*, Paris: La Découverte 2008 ; Christian Delaporte, Denis Maréchal, Caroline Moine, Isabelle Veyrat-Masson (eds.), *La guerre après la guerre. Images et construction des imaginaires de guerre dans l'Europe du XX^e siècle*, Paris: Nouveau Monde editions 2010. 家庭における記憶を中心とした、ナチ時代の過去にかんするメディア間の相互関係については、Harald Welzer, *Opa war kein Nazi! Nationalsozialismus und Holocaust im Familiengedächtnis*, Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch 2002 を参照。
- 15) 「公共史」概念については、さしあたりドイツにおける議論として以下を参照。Frank Bösch, Constantin Goschler (eds.), *Public History. Öffentliche Darstellungen des Nationalsozialismus jenseits der Geschichtswissenschaft*, Frankfurt am Main: Campus 2009.
- 16) Dominique Trouche, *Les mises en scène de l'histoire. Approche communicationnelle des sites historiques des guerres mondiales*, Paris : L'Harmattan 2010.
- 17) Isabelle Benoit, "Acteurs communs et alliances différentes: une comparaison franco-allemande des politiques de mémoire", in: Wahnich (ed.), *op.cit.*, pp.55-82, 56.
- 18) 以下の点については、概観として参照。ピエール・リグロ (宇京頼三訳)『第二次世界大戦下のアルザス・ロレーヌ』白水社、2000年、拙稿「国境地域の記憶の場—アルザス・ロレーヌの事例から」『メトロポリタン史学』10 (2009), 52-82 頁。
- 19) ただし、このことは戦勝国、領有国側だけに限られたことではないことは、ドレフュス事件がよく示している。
- 20) Robert Steegmann, *Le KZ Natzweiler et ses commandos. Une nébuleuse concentrationnaire des deux côtes du Rhin 1941-1945*, Strasbourg: La Nuée Bleue 2005.
- 21) Alexa Stiller, "Grenzen des 'Deutschen'. Nationalsozialistische Volkstumspolitik in Polen, Frankreich und Slowenien während des Zweiten Weltkriegs", in: Mathias Beer, Dietrich Beyrau, Corneila Rauh (eds.), *Deutschsein als Grenzerfahrung. Minderheitenpolitik in Europa zwischen 1914 und 1950*, Essen: Klartext 2009, pp.61-84, 81. マリー＝ルイズ・ロート＝ツィンマーマン (早坂七緒訳)『アルザスの小さな鏡—ナチスに屈しなかった家族の物語』法政大学出版局、2004年。
- 22) Eugène Riedweg, *Les "Malgré-nous". Histoire de l'incorporation de force des Alsaciens-Mosellans dans l'armée allemande*, Strasbourg: La Nuée Bleue 1995, pp.99, 137; Bernard Poloni, "Frankreich und das Problem deutschsprachiger Minderheiten am Ende des Zweiten Weltkrieges", in: Manfred Kittel et al. (eds.), *Deutschsprachige Minderheiten 1945. Ein europäischer Vergleich*, München: Oldenbourg 2007, pp.523-570, pp.529-530.
- 23) ロレーヌについては、後述のオラドゥール事件も相まって、武装親衛隊への召集は行われなかったという風説が広まったが、これは誤りである。ただし、動員された年次の相違もあり、ロレーヌから武装親衛隊への召集がアルザスに比べて少なかったことは事実である。Nicolas Mengus, André Hugel, *Entre deux fronts. Les incorporés de force alsaciens dans la Waffen-SS*, vol.1, Paris: Édition Pierron 2007, pp.22-31.
- 24) 「粛清」にかんしては、以下を参照。Jean-Laurent Vonau, *L'épuration en Alsace. La face méconnue de la Libération, 1944-1953*, Strasbourg: Édition du Rhin 2005; Christine Kohser-Spohn, "L'Épuration de 1945 en Alsace, un vecteur de la réconciliation entre la France et l'Allemagne?", in: Bernard Ludwig, Andreas Linsenmann (eds.), *op.cit.*, pp.179-198.

- 25) Poloni, art.cit., p.539.
- 26) Corine Defrance, "La dimension régionale dans le rapprochement franco-allemand: l'Alsace face à l'Allemagne de l'immediat après-guerre au début des années 1970", in: Marie-Bénédicte Vincent, Yves Dénéchère (eds.), *Vivre et construire l'Europe à l'échelle territoriale de 1945 à nos jours*, Bruxelles: Peter Lang 2010, pp.145-158.
- 27) Kohser-Spohn, art.cit., p.194.
- 28) 1947年には、ド＝ゴールによって、ドイツ兵として戦死した強制召集兵にも「フランスのために戦死した mort pour la France」という「資格」が与えられている。
- 29) 「オラドゥール事件」については、Sarah Farmer, *Oradour 10 juin 1944. Arrêt sur mémoire*, Paris: Calmann-Lévy 1994; Jean-Jacques Fouché, *Oradour*, Paris: Liana-Levi 2001などを参照。
- 30) Sarah Farmer, "Postwar Justice in France. Bordeaux 1953", in: Istvan Deák, Jan T. Gross, Tony Judt (eds.), *The Politics of Retribution in Europe. World War II and its aftermath*, Princeton: Princeton UP 2000, pp.194-211.
- 31) Claudia Moisel, *Frankreich und die deutschen Kriegsverbrecher. Politik und Praxis der Strafverfolgung nach dem Zweiten Weltkrieg*, Göttingen: Wallstein 2004, pp.148-158.
- 32) 以下における引用。Cornelia Rauh, "Elsässische Gedächtniskultur und französische Vergangenheitsbewältigung im Widerstreit", in: Rauh, Mathias Beer, Dietrich Beyrau (eds.), *op.cit.*, pp.164-174, 170-171. ただし、ロレーヌでは、実行犯部隊に出身者がおらず、また犠牲者のなかにロレーヌから疎開した44人も含まれていたこともあり、こうした連帯感の表明は弱かった。また、アルザス出身の犠牲者も数名存在していたが、彼らに対する記憶は地域世論の被告との同一化のなかで埋没することになった。
- 33) この2つのリストの写真はオラドゥール平和記憶センターのカタログに掲載されている。 *Comprendre Oradour. Centre de la mémoire d'Oradour. L'intégrale du parcours de mémoire. Documentation - Iconographie - Témoignages*, Limoges: Etablissement public administratif départemental du Centre de la mémoire, p.124.
- 34) Eve Cerf, "Récits de guerre alsaciens. Mémoires et oublis" in : *Revue des sciences sociales de la France de l'Est* 20(1993), pp.36-50 ; Nicolas Mengus, "Les Français d'Alsace-Moselle déportés dans l'armée allemande", in: *Comprendre... l'incorporation de force 2, numéro hors-série de l'ami hebdo*, Automne 2012, pp.4-14, 12 ; Clemens Krüger, "Zwangsrekrutierung und autobiographisches Erzählen der elsässischen 'Malgré Nous' (Wehrmachtsoldaten)", Mathias Beer, Dietrich Beyrau, Cornelia Rauh (eds.), *op.cit.*, pp.135-162.
- 35) Rainer Riemenschneider, "Grenzprobleme im Schulbuch. Dokumentation zur Darstellung der Annexion von Elsaß und Lothringen in deutschen und französischen Geschichtsbüchern von 1876 bis 1976", in: *Internationale Schulbuchforschung* 2(1980), pp.85-107.
- 36) Roger Siffer, " 'Adolf, il a pas fait que des conneries' ", in: Bernard Reumaux, Philippe Breton (eds.), *L'Appel de Strasbourg. Les régions aux prises avec l'extrême droite. Le réveil des démocrates*, Strasbourg: La Nuée Bleue 1997, pp.155-158.
- 37) 同様のことは、2006年のギュンター・グラスの親衛隊の過去の告白をめぐる論争についてもあてはまる。Jean-Claude Herrgott, *Train d'enfer, la mémoire oubliée. Une locomotive du IIIe Reich pour monument?*, Paris : L'Harmattan 2008, p.15.
- 38) Kohser-Spohn, art.cit., p.196.
- 39) Defrance, art.cit., p.147.

- 40) Eugène Riedweg, *op.cit.*, pp.289-290. ムンダートの森の帰属問題については、以下を参照。Ansbert Baumann, "Ein deutsch-französischer Grenzfall – Der Mundatwald bei Weissenburg", in: *Mitteilungen des Historischen Vereins der Pfalz* 107(2009), pp.433-455.
- 41) Dieter Tiemann, *Die Geschichte des Straßburg-Preises 1963-1996. "Vordringlich war die Bereinigung des deutsch-französischen Verhältnisses"*, Hamburg: Christians 2001.
- 42) *Mémorial d'Alsace-Moselle. Le musée d'une histoire tourmentée de 1870 à nos jours*, Clermont-Ferrand: Éditions Un, Deux... Quatre 2008, p.132.
- 43) "L'inquiétude des combattants", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 28/10/1996. この動議が端緒となったことについては、3年後の1999年の同支部会議においても確認されている。"Les anciens combattants en congrès", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 25/10/1999. なお、記念館における普仏戦争からオラドゥール裁判に至る歴史のナラティブを、すでにテレビドラマとして実践した作品である『アルザス人たち—あるいは2人のマチルド』が独仏共同テレビ局 ARTE で放映されたのも、1996年のことである(中本『アルザスと国民国家』p.172には1994年となっているが、これは誤りである)。ただし、このドラマではオラドゥール事件のようなフランス「内地」とアルザスの間の問題としてではなく、ドイツ軍部隊内でアルザス人逃亡兵を別のアルザス人兵士が射殺したことをめぐる裁判が設定され、アルザス内部の問題として描かれている。
- 44) Jean-Laurent Vonau, "Pour un mémorial du Souvenir 39-45 en Alsace-Moselle", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 08/05/1997.
- 45) *Mémorial d'Alsace-Moselle, op.cit.*, p.132.
- 46) "Un mémorial pour les Alsaciens-Mosellans", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 22/02/1998; Alfred Wahl, "Chemin de la mémoire en Alsace-Moselle", in: Armin Heinen, Dietmar Hüser (eds.), *Tour de France. Eine historische Rundreise. Festschrift für Rainer Hudemann*, Stuttgart: Franz Steiner 2009, pp.77-80, 78.
- 47) Alfred Wahl (ed.), *Les Alsaciens-Mosellans dans la deuxième guerre mondiale 1939-1945. Catalogue de l'exposition itinérante*, Paris: Secrétariat d'Etat auprès du Ministre de la Défense chargé des anciens combattants et des victimes de guerre 1984. さらに1986, 1988年にも体験者の(地域語による)証言を集めた映像記録が展示開催されており、これらの動きが1990年代になってからの記念館建設への前提となった。François Igersheim, "Mémoire et historiographie de l'incorporation de force. Le choc d' 'Avant l'Oubli' (1986, 1988)", in: *Revue d'Alsace* 138(2012), pp.225-240.
- 48) Olivier Wieviorka, *Divided Memory. French Recollections of World War II from the Liberation to the Present*, Stanford: Stanford University Press 2012, pp.144-146. (仏語原著: *La mémoire désunie. Le souvenir politique des années sombres, de la Libération à nos jours*, Paris: Éditions du Seuil 2010).
- 49) Philippe Richert, *Passion d'Alsace. Pour une région audacieuse et unie*, Strasbourg: La Nuée Bleue 2009, pp.106-114. 興味深いことに、リシェールは両大戦間期の自治派の分権化要求(1934年、2つの県議会の合併による地域議会とそこから選出される行政機関の設置)を自らの先駆者として位置づけており、そこには戦後の粛清のなかで有罪判決を受けた自治主義者の名前も挙がっている(p.121)。なお、この地域圏と2つの県議会の合併に関する住民投票が2013年4月に行なわれ、リシェールらの提案は却下された。このことが示すように、彼の分権化に関する歴史の議論は現在までのところ住民レベルで説得力をもつものではなかった。Cf. Christian Bach, "Les Alsaciens ont dit trois fois 'non' au projet de fusion des conseils généraux et du conseil régional", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 7/4/2013.
- 50) "Les anciens expulsés, réfugiés et évadés se souviennent", in: *Dernières Nouvelles d'Alsace*,

- 19/05/1999. ここで述べられている 42 万人が何を指すのかは定かではないが、上述のように、政府の指示の下避難した住民は約 60 万（アルザス両県 37 万人、モーゼル県 22 万人）、さらに該当地域以外からの自発的な避難民がアルザス・モーゼル全体で約 10 万人ほどといわれており、全体で 70 万人が移動したといわれる。Cf. Benoît Laurent, *The evacuation of 1939-1940 for the departments of Bas-Rhin, Haut-Rhin and Moselle: legal, economic and social study*, Thèses de doctorat, Université de Strasbourg 2011.
- 51) Jean-Louis English, “L’ambition de la mémoire libérée”, in: *Dernières Nouvelles d’Alsace*, 24/11/2001 ; ibid., “Le mémorial d’Alsace-Moselle: révéler l’histoire, contrer l’oubli”, in : *Revue d’Alsace* 129(2003), pp.433-437.
- 52) ただし、すでに 1985 年には、タンボフ近郊のキルサーノフの墓地に埋葬された 347 名のフランス人捕虜のリストが、ソ連赤十字の仲介でフランス政府に渡されており、グラスノスチを標榜するゴルバチョフ時代において一定の変化があったことも事実である。Alphonse Troestler, “À la source des archives russes”, in: *Tambov. Le camp des Malgré Nous alsaciens et mosellans prisonniers des Russes*, Strasbourg : La Nuée Bleue 2010, pp.105-112, 105-6.
- 53) Jacques Fortier, “En Pèlerin dans la forêt russe”, in: *Tambov. op.cit.*, pp.97-99.
- 54) “L’initiative des jeunes”, *Dernières Nouvelles d’Alsace*, 27/10/1996.
- 55) “Le mémorial se construira”, *Dernières Nouvelles d’Alsace*, 02/10/1997.
- 56) “Mémorial à Tambov: première étape”, *Dernières Nouvelles d’Alsace*, 17/01/1998.
- 57) “Projet contesté de mémorial sur la guerre de 1939-1945 à Schirmeck”, in: *Libération*, 26/12/1999.
- 58) Sylvie Bodin, “Une conviction commune. Rapprochement entre Oradour et Strasbourg”, in: *Les Saisons d’Alsace*, hors série Mai 2012. *Août 1942. Le drame des incorporés de force*, pp.82-91, 83.
- 59) “Pâques à Oradour”, *Dernières Nouvelles d’Alsace*, 13/04/1998.
- 60) Sylvie Bodin, art.cit., p.83.
- 61) “Pâques à Oradour”, art.cit.
- 62) “Roland Ries, Oradour et Tambov”, *Dernières Nouvelles d’Alsace*, 20/06/1998.
- 63) “Chirac bénit la réconciliation d’Oradour avec l’Alsace”, *Libération*, 17/07/1999; “Trois statues pour Oradour”, *Dernières Nouvelles d’Alsace*, 10/07/1999. ただし、三体の立像はその後嵐と破壊行為によって破損された。ADEIF 会長の J.-P. バイヤールは、このことがアルザスが依然としてオラドゥールやリムーザン地方では嫌われている証拠であると語っている。“Oradour-sur-Glane : l’Alsace et le Limousin se déchirent encore”, *Le Nouvel Observateur*, 16/09/2012.
- 64) “À Oradour-sur-Glane, il y avait dix Alsaciens parmi les victimes”, *L’Alsace*, 15/01/2013.
- 65) “Oradour, la mémoire: ‘J’aurais pu en être!’”, *Dernières Nouvelles d’Alsace*, 18/07/1999; “Oradour: des réactions”, *Dernières Nouvelles d’Alsace*, 07/08/1999, 15/08/1999.
- 66) “Roland Ries: ‘Je n’étais pas venu demander pardon, mais tendre la main…’”, in: *Les Saisons d’Alsace*, hors série Mai 2012. *Août 1942. Le drame des incorporés de force*, p.85.
- 67) 対独協力者とその記憶の問題について、主にプロテスタント牧師にかんする示唆的な論考として、以下を参照。Marc Lienhard, “Méandres de la mémoire: les Alsaciens sympatisants et collaborateurs du régime nazi”, in: Jean-Pierre Rioux (ed.), *Nos embarras de mémoire. La France en souffrance*, Panazol: Lavauzelle 2008, pp.119-129.
- 68) “Mémorial: les questions du grand rabbin Gutman”, *Dernières Nouvelles d’Alsace*, 25/09/1999.
- 69) “Freddy Raphaël, professeur de sociologie: ‘Aujourd’hui, l’histoire nous éclate à la figure.’”, *Libération*, 28/12/1999. オーストリアがヴァルトハイム事件以降、自らの歴史的責任に向き合うようになった一方

で、アルザスでは依然として「被害者神話」が続いていると指摘するものとして、以下を参照。Laird Boswell, "Should France be Ashamed of its History? Coming to Terms with the Past in France and its Eastern Borderlands", in: *Totalitarian Movements and Political Religions* 9(2008), pp.237-251, 247. 比較の上での論点は、本文でも述べたように、オーストリアのアンシュルスにおける国民投票とアルザス・ロレーヌの一方的併合をどのように評価するか、ということになる。

- 70) Bernard Schwengler, *Le vote Front National. L'Alsace : un cas particulier ?*, Strasbourg : Oberlin 2003 ; *ibid.*, "L'Alsace ou le vote Front national dans une région de droite", in: Pascal Delwit (ed.), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Bruxelles : Editions de l'Université de Bruxelles 2012, pp.211-226.
- 71) このスキャンダルについて、詳細は以下参照。Jean-Claude Herrgott, *op.cit.* なお、当該の機関車がユダヤ人移送に使用された事実は確認されない、と市長は弁明している。
- 72) Alfred Wahl (ed.), *Les Alsaciens-Mosellans dans la deuxième guerre mondiale 1939-1945*, *op.cit.*
- 73) Cf. "Alphonse Troestler, l'humaniste engagé de Rosheim", *L'Alsace*, 19/9/2011.
- 74) 他にも、学術委員会のメンバーである歴史家には政治活動を行っている者も多く（例えば委員長のアルフレッド・ワールはシュヴェヌマン率いる「共和国市民運動」MCRの候補となった経歴があり、またウージェヌ・リードヴェークは社会党、のちLGMの政治家としてミュールーズ市の助役でもあった）。こうした政治と学術の近さはフランス全体についてもあてはまり、ドイツと比べると明らかである。ただし、これらの異なる政党にかかわる歴史家が参加していることが示しているように、学術委員会に党派的に明示的な偏りがみられるわけではない（とはいえ、左右両翼の急進派・共産党と国民戦線は含まれない）。
- 75) Henning Meyer, *Der Wandel der französischen "Erinnerungskultur" des 2. Weltkriegs. Das Beispiel dreier "Erinnerungsorte": Bordeaux, Caen und Oradour-sur-Glane*, Saarbrücken: Verlag Dr. Müller 2009, pp. 206, 312. カーンの記念館における展示内容の仕様書作成は、バリの現代史研究所（IHTP）の全面的な協力の下、行なわれた。
- 76) ワール以外の地元歴史家には、ドイツ史の専門家ピエール・エーソベリー、ストルートホーフ強制収容所にかんするモノグラフィーを著したロベール・ステークマンがいた。ストルートホーフの学術委員会 Conseil scientifique のメンバーのリストは以下を参照。
<http://www.struthof.fr/fr/le-centre-europeen/la-creation-du-centre-europeen-du-resistant-deporte/remerciements/>（アクセス：2013年12月30日）
- 77) Alfred Wahl, "Chemin de la mémoire", *art.cit.*, p.77.
- 78) 英米のアルザス史研究については、以下を参照。Alison Carrol, "Les historiens Anglophones et l'Alsace. Une fascination durable", in: *Revue d'Alsace* 138(2012), pp.265-283.
- 79) Kurt Hochstuhl, "Regionalgeschichte in einer grenzüberschreitenden Region, die TriRhena Region", in: *Revue d'Alsace* 133(2007), pp.103-114; Bernard Vogler, "Les publications historiographiques alsaciennes (1950-2000)", in: *ibid.*, pp.359-370; Dominique Lerch, "L'histoire d'Alsace et ses courants (1945-2000)", in: *ibid.*, pp.385-414.
- 80) "Marc Ferro : 'Les Alsaciens ne sont pas des victimes de l'Histoire' Entretien avec Jean-Pierre Bouteiller", in: *Les Saisons d'Alsace*, 27(2005), pp.39-40. 中本、前掲書, pp.185-6. 示唆的なことに、このインタビュー記事においてフェローは「第二次世界大戦史をもっとよく知る者の一人」であり、「国民史研究の比較の専門家 spécialiste de la comparaison des historiographies nationales」と紹介されている。

- 81) たとえば、フェローの議論から2年後の以下の論考を参照。Pierre Koenig, „Les 'Malgré-nous'”, in: *Revue d'Allemagne et des pays de langue allemande* 39(2007), pp.485-499, 496-497.
- 82) カーンの平和記念館については、Benjamin C. Brower, “The Preserving Maschine. The 'New' Museum and Working through Trauma – The Musée Mémorial pour la Paix of Caen”, in: *History & Memory* 11(1999), pp.77-102 ; Henning Meyer, *op cit.*, pp.164-277 を参照。ベロンスの大戦歴史記念館については、Gerd Krumeich, “Der Erste Weltkrieg im Museum. Das 'Historial de la Grande Guerre in Péronne und neuere Entwicklungen in der musealen Präsentation des Ersten Weltkriegs”, in: Barbara Korte / Sylvia Paletschek / Wolfgang Hochbruch (eds.), *Der Erste Weltkrieg in der populären Erinnerungskultur*, Essen: Klartext 2008, pp.59-72, さらにジャン＝ジャック・ベッケール, ゲルト・クルマイヒ (剣持久木・西山暁義訳)『仏独共同通史 第一次世界大戦』岩波書店, 2012年, 下巻, 訳者解説を参照。
- 83) “Historial: un projet et des sites”, *Dernières Nouvels d'Alsace*, 31/12/1998.
- 84) “En Alsace, la construction d'un memorial ravive la controverse autour des 'malgré-nous'”, *Le Monde*, 26/12/2002.
- 85) “Historial: un projet et des sites”, *art.cit.*
- 86) “Schirmeck, ville du souvenir”, *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 8/4/1999.
- 87) 以下の本節における各展示スペースの記述は, Mémorial d'Alsace-Moselle, “Ein Projekt einer ganzen Region”, Dossier de Presse allemand, 13/11/2007, 及び展示カタログ Mémorial d'Alsace-Moselle, *op.cit* をふまえたものである。
- 88) Dominique Trouche, *op.cit.*, pp.49-50.
- 89) このような地名の「ゲルマン化」は第一次世界大戦前のドイツ領時代には行われなかったが, これについては第1の展示スペースにおいて特に明記はされていない。
- 90) Dominique Trouche, *op.cit.*, pp.88-89. さらに Benjamin C. Brower, *art.cit.* ; Henning Meyer, *op cit.* も参照。
- 91) “Il est temps de comprendre l'histoire de l'Alsace et de la Moselle”, *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 21/10/2004.
- 92) “Une symbiose entre atmosphère et documents”, in : *Le Courrier du Mémorial*, 2(Février 2002), p.6. さらに参照。Claude Keiflin, “Un Mémorial pour l'histoire”, in : *Les Saisons d'Alsace* 14(2002). La mémoire vive de l'Alsace, pp.73-77, 76.
- 93) Patrick Prado, “L'Ethnologie française au musée? ou un nouveau musée de l'ethnologie à la française?”, in: *Terrain* 25(1995), p.147-157, 151.
- 94) Dominique Trouche, *op.cit.*, p.101.
- 95) Krumeich, *art.cit.*, pp.61-62, 67. この点で彼は, ベルギー・イーブルのフランダース・フィールド博物館における追体験型展示を「リアリティー・ショー」として批判している。
- 96) Dominique Trouche, *op.cit.*, p.87.
- 97) アルザス・モーゼル記念館友の会会長マルセル・スピセル氏の証言による。
- 98) さらに言えば, 歴史博物館におけるマーケティングの問題もまた, 公共史における重要な論点となる。これについては, さしあたり以下を参照。Christoph Kühlberger / Andreas Pudlat (eds.), *Vergangenheitsbewirtschaftung. Public History zwischen Wirtschaft und Wissenschaft*, Innsbruck: StudienVerlag 2012.
- 99) Claude Keiflin, “L'émotion et le spectacle au service de l'Histoire”, in : *Les Saisons d'Alsace* 27(2005), pp.71-73, 73.
- 100) “Inauguration. Mémorial de l'Alsace-Moselle: les premiers visiteurs séduits”, *Dernières Nouvelles d*

- Alsace*, 19/06/2005.
- 101) Alfred Wahl, "Chemin de la mémoire en Alsace-Moselle", p.78.
 - 102) Claude Keiflin, art.cit., p.73.
 - 103) "Inauguration: Mémorial de l'Alsace-Moselle", art.cit.
 - 104) "Mémorial de l'Alsace-Moselle : les premiers visiteurs séduits", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 19/6/2005; "Ouverture: foule et émotion", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 20/6/2005.
 - 105) "L'avis du maire d'Oradour", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 19/6/2005.
 - 106) 友の会の機関誌 *Le Courrier du Mémorial* 各号に記載されている活動記録を参照。
 - 107) Cf. "Courrier: Oradour et les incorporés de force", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 04/12/2011 ; "Oradour-sur-Glane: l'Alsace et le Limousin se déchirent encore", *Le Nouvel Observateur*, 16/9/2012 ; Dominique Jung, "Oradour et la Cour de Cassation. Les plaies de la mémoire", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 17/10/2013. コルマール控訴院の有罪判決が、アルザス人の武装 SS への召集の強制性に疑義を与えることが言論の自由の範囲を超えているとしたのに対し、破棄院は原告団体 (ADEIF) にとって受け入れがたいものであっても、エブラスの記述は論争の対象となる歴史問題について疑問と呈したに過ぎず、言論の自由の限界を超えたものではない、とした。このことは、併合とそれに伴う徴兵の強制がホロコーストやアルメニア人虐殺のように記憶法によってその否定が法的追及の対象となるジェノサイド的「歴史の真実」とは異なるものであるとの認識を示したことを意味している。
 - 108) さらに 2013 年 9 月の連邦大統領ヨアヒム・ガウクのオラドゥール訪問において、破棄院判決を控えたエブラスが同行したことに対しても、アルザスの世論の一部からは不満の声が上がった。"Oradour-sur-Glane. Première visite d'un dirigeant allemand de l'ignominie au pardon", <http://www.malgre-nous.eu/spip.php?article2994&lang=fr>.
 - 109) "Anciens combattants : revendications insatisfaites", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 26/11/2005; "Courrier des lecteurs", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 21/3/2006.
 - 110) "Au mémorial s'il est élu", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 30/4/2007. なお、2010 年の DNA の記事によれば、2005 年 6 月の開館に際し、大統領府長官は議員たちに送られた書簡において、「アルザスは歴史の犠牲者を自認するのではなく、その主体でもある」と述べており、これは上述のマルク・フェローの議論と同様であった。確実な証拠は存在しないが、こうした認識が、シラクが記念館の開館に参加せず、ストルトホーフの式典と併せて訪問した選択の背景にあったことは十分に推測できる。"Lettre à Nicolas Sarkozy pour le 8 Mai", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 8/5/2010.
 - 111) これについては拙稿「国境からのまなざし」「メトロポリタン史学」、p.78 を参照。サルコジの演説は、記念館友の会の機関誌にも再掲されている。"Les Morceaux choisis du Président Nicolas Sarkozy. 'Réparer une injustice'", *Le Courrier du Mémorial* 16(2010), p.16.
 - 112) Lettre du Club Jacques Peirotes au Mémorial d'Alsace-Moselle, le 28 Mars 2006, "Mémorial du Malaise".
 - 113) *Mémorial d'Alsace-Moselle*, op.cit., p.87.
 - 114) G.S./R.S. (milieu mars 2009), in : *Livre d'or (dec.2007-sep.2009)*. (ドイツ語) 特に明記されていない場合はフランス語によるメッセージである。また氏名はイニシャルのみを表記する。
 - 115) A.M. (fin mars 2010), in : *Livre d'or (sept.2009-nov.2010)*. (英語)
 - 116) "Un livre d'or éloquent", in : *Le Courrier du Mémorial* 7(2006), p.4. ここには、仏独の見学者のメッセージとともに、ある日本人見学者のメッセージが日本語のまま掲載されている。(「とてもおもしろかったです。しかし戦争というものは人間の中に生まれつきなのだろうか。それは問題。東京、日本」)

- 117) E.B., (début août 2010), in: *Livre d'or* (sept.2009-nov.2010). 彼女はさらに続けて、ヨーロッパがこれからの世代のために団結しなければならないのであり、偏狭なナショナリズムに回帰するためではないと述べ、「過去の情報も必要ではあるが、未来を拓くことも重要だ」と結んでいる。むろん、彼女の誤解を指摘することは容易であるが、彼女にとって演出がそのような誤解を与えたこと自体は注目に値する。他方、逆に子供たち（15歳前後）が展示にショックを受けつつも、見学後「来てよかった」と感謝された、との感想もある。F.J.C.G., 21/8/2006, in: *Livre d'or* (febr.2006-sept.2006).
- 118) M., 27/7/2005, in: *Livre d'or* (juillet 2005-dec.2005).
- 119) S.M., 23/5/2006, in: *Livre d'or* (febr.2006-sept.2006).
- 120) A.B., 30/4/2006, in: *Livre d'or* (febr.2006-sept.2006).
- 121) "des visiteurs de Wimmenau", 28/5/2006, in: *Livre d'or* (febr.2006-sept.2006). この「感想」は、事前に印刷されたものが約20名のサインとともに感想ノートに貼り付けられたものである。ちなみに、このウィムノー（アルザス北部）は、リシュールの出身地でもある。
- 122) D.D., 24/10/2009, in: *Livre d'or* (sept.2009-nov.2010). しかしまさに当時、「サラーム・アルザス」と題する、19世紀以来の北アフリカとアルザスの関係についての特別展示が開催されていた（Olivier Terrenère, "Mémoire partagée", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 29/3/2009）。ただし、この見学者が指摘する点についての展示があったかどうかは確認できなかった。
- 123) Claude Keiflin, "Mémorial de l'Alsace-Moselle: Un projet d'extension. Une ouverture sur l'Europe de la paix", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 29/5/2011.
- 124) 「ヨーロッパ博物館」は2011年まで断続的に、移動しつつ展示されてきた。ただし常設展示の展示はまだ実現しておらず、準備展示をふまえて現在は改装中である。
<http://www.expo-europe.be/content/view/13/32/lang.en/>. (アクセス：2013年12月30日)
- 125) "Hommages à nos pères", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 11/6/2006. さらに同協会の最も攻撃的なアピールは、「私はドイツとは和解していない—エリゼ条約の記念日は私にとって悲嘆の日である」と題された声明において読むことができる。"Mit Deutschland bin ich nicht versöhnt! Gedenkfeier, Jubiläum dem Elysee-Vertrag ist für mich einen Trauertag"[sic].
http://www.malgre-nous.eu/IMG/pdf/13_Januar_2013_Mit_Deutschland_bin_ich_nicht_versohnt-doc-AbracadabraPDF-web.pdf. (アクセス：2013年12月30日)
- 126) "Compte rendu de l'Assemblée générale ordinaire de l'OPMNA à Bitche le 4 juin 2010".
http://www.malgre-nous.eu/IMG/pdf_CR_OPMNA_Bitch.pdf. (アクセス：2013年12月30日)
- 127) Jean-Claude Herrgott, "La mémoire au pied du mur", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 4/9/2009.
- 128) Claude Keiflin, "Faut-il construire un mur des noms?", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 15/2/2009.
- 129) Ibid. 付言すると、モーゼル県でも同様の計画が進められており、グラウヴロットの博物館に1870年以降の戦争犠牲者の名前の壁が設置される予定であり、アルザスの場合よりもより長期間を対象とするものになっている。
- 130) ウージェーヌ・フィリップス（宇京頼三訳）『アイデンティティの危機—アルザスの運命』三元社、2007年。
アンドレ・ヴェックマン（宇京早苗訳）『骰子のように—アルザス年代記』三元社、1994年。
- 131) "Les Malgré-nous d'Europe au Mémorial d'Alsace-Moselle", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 11/11/2012; "Conférence-débat au Mémorial d'Alsace-Moselle: 'Mémoire d'Europe, mémoires de paix'", *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 18/5/2012; "Ecrire une histoire européenne de l'incorporation de force",
<http://www.malgre-eux-2012.eu/projet#home>. (アクセス：2013年12月30日)
- 132) Marcin Wiatr, "Eine Schifffahrt ins Ungewisse. Zum Streit um die geplante Oberschlesien-

Ausstellung des Schlesischen Museums in Kattowitz", in: *Dialog. Deutsch-Polnisches Magazin* 103(2013), pp.68-74. なお、この（挫折した）オーバーシュレジェン史展示の責任者であったレシェック・ヨドリンスキ氏は、2013年9月9日グリヴィツェのドイツ・ポーランド友好会館で行われたインタビューにおいて、筆者を含めた科研基盤研究（B）「歴史認識の越境化とヨーロッパ公共圏の形成」のメンバーとの面談において、彼がモデルとしていたのが、クラクフのシンドラーのホウロウ工場跡地に立つ第二次世界大戦歴史博物館であった、と語っている。この博物館もまた、再現手法を多用している点の特徴である。Cf. Monika Bednarek et al., *Kraków under Nazi Occupation 1939-1945*, Kraków: Muzeum Historyczne Miasta Krakowa 2011（展示カタログ英語版）。

- 133) Gérard Traband, *Effacer la frontière. Soixante ans de coopération franco-allemande en Alsace du Nord*, Strasbourg : La Nuée Bleue 2008, pp. 271-272.